

インターカルチャー

INTERCULTURE

NO.119

2008年10月号

OCTOBER



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

オーストラリアホームステイ

サマーキャンプ

留学報告

英検1級に1名合格

独語スピーチコンテスト2位入賞



2008 夏「オーストラリアホームステイ」「サマーキャンプ」

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、国内外のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生（日本の小学6年生～中学3年生春学期）をミドルスクール (MS)、9年生～12年生（日本の中学3年生秋学期～高校3年生）をハイスクール (HS) と呼んでいます。

home

大迫弘和
SIS 校長

学校という場がそこで学んだ生徒たちにとっての home になることができたと思います。幸福なことに私たちの学校SISは、そのような学校でありえています。

home, 精神的な意味で。そして生涯にわたって学び続ける、一人の人間としての基礎を形成する場所としての home。

この夏も多くの卒業生たちが様子を知らせてくれました。卒業生はSISがあったから今の自分があると言ってくれます。SISが home だとも。

そして僕は次のように思うのです。

あなたたちにSISで学んだ日々があったから、今のあなたたちがあるように、あなたたちがいてくれたから、SISが今のようなSISであることができているのです、と。

SISがいつまでも home であり続けられますように。

一人の卒業生からの便りを、本人の了解をいただき、掲載します。本校の中等部1年生に国内一般生徒として入学し本校で中高6年間を学んだ渡部麻衣子さんです。

◇◇◇

大迫弘和校長先生

拝啓

蟬の声が力強さを増す頃、先生におかれましてはお変わりなくお過ごしのこととお慶び申し上げます。

大変ご無沙汰しております。98年に卒業致しました渡部麻衣子です。覚えていらっしゃるでしょうか。卒業後、国際基督教大学に進み、英国 Warwick 大学大学院で博士号を取得し、現在東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター公共政策研究分野にて研究員をしております。この度、二年前まで働いていたNPO 法人市民科学研究室で企画した翻訳本が出版の運びとなりましたので、私の学びの原点である貴校に是非謹呈させて頂きたく、不躰ながら送らせて頂く次第です。図書館の蔵書の一つに加えて頂ければ幸いです。

この本は、科学技術の開発を民主的に進めようという地道な運動の一つに位置づけられるものです。もしかすると、「サ

イエンスカフェ」という取り組みを耳にされたことがあるかもしれません。ご近所の大阪大学コミュニケーションデザインセンターが積極的に取り組んでおられますが、これは科学者と一般市民が対話する場の形成を目指すものです。この本を通し、「サイエンスカフェ」をはじめとして、今、色々 などで行われている、科学が人の生活や人間そのものにとってより良いものであるために目指すべき方向についての議論やそのための取り組みに、後輩が加わってくれることも少なからず期待しております。実際本書は、ダイバートのトピックとなり得る話題をいくつか提供しております。まだダイバートの授業はあるのでしょうか。懐かしく思い出します。

決して理系科目の得意な生徒ではなかった私が、今こうして科学技術に関係するお仕事をするに至った出発点を思い起こしてみますと、やはり千里国際学園での学びに行きつきます。世界について、というよりも人間と人間社会について、世界的な視野から考える機会を10代のうちに与えられたということは、振り返ると幸せなことだったと思います。感謝の気持ちは、実際には、貴校での学びを、身近にある人たちに対して今後少しずつ還元していくことで表したいと思っておりますが、この本が、少しでも貴校への直接の感謝表明になればと思います。

また、現在働いている東大医科研ヒトゲノム解析センター公共政策研究分野で作成致しました、バイオバンクに協力して下さっている患者さん向けのニュースレター、『バイオバンク通信』の4号10部も同封させて頂きました。興味のある後輩に差し上げて下さると嬉しいです。万が一足りない場合にはさらにお送り致しますのでお伝え下さいませ。

まだまだ過ごしにくい暑さの日が続きますが、どうぞご自愛下さい。

貴校の今後のさらなる発展をお祈りしております。

敬具
渡部麻衣子

◇◇◇

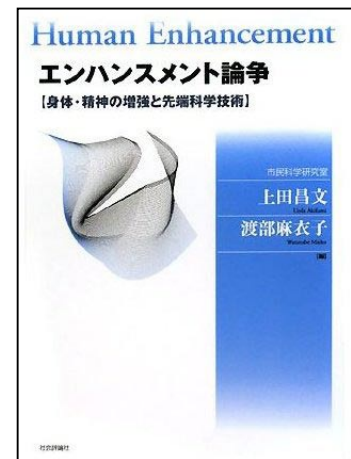
「私の学びの原点」と書いてくださっていることを本当にうれしく思います。

「世界について、というよりも人間と人

間社会について、世界的な視野から考える機会を10代のうちに与えられたということは、振り返ると幸せなことだったと思います。」

Learning for Life 生涯にわたって学び続けること。

卒業生を優れたモデルとして持つことができ始めた私たちSISは、偏差値競争に振り回される日本のどうしようもなく矮小な教育世界のはるか上方を、今後も誇りを持って飛翔し続けていけるでしょう。



(注) 渡部麻衣子さんの著書は図書館の貸出デスク付近に置いてあります。

千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつけられています。

<5つのリスペクト>

自分を大切にする

他の人を大切にする

学習を大切にする

環境を大切にする

リーダーシップを大切にする

オーストラリアホームステイ

難波和彦

英語科

オーストラリアホームステイについては、7月12日土曜日に出発して、8月4日に大阪に帰ってきました。

今回は38人という大所帯で、お世話になった学校は、例年と同じくSandgateとNarangbaの2校です。付き添い教員は、平尾教頭先生、PEの加納先生、英語科難波の3人でした。

Buddyの家にホームステイをしながら、現地の学校に3週間通うというプログラムで、生徒たちは、普通の観光では味わえないような貴重な異文化体験をしました。季節は冬ですが穏やかな気候で、雨が降ると寒く感じる日がありました。ホストファミリーの方々、生徒たちを大事にしてくれて、多くの時間を一緒に過ごしてれました。

ホームページに毎日の詳細なレポートが載っていますので、そちらをぜひご覧ください。

<http://www.senri.ed.jp/sis/classof2012/08homestay/>

◇

<Web ページから>

7月15日(火)

いよいよ学校が始まりました。

Sandgate

8時45分スタートですが、7時半ごろから生徒が登校を始めていました。オーストラリアの生徒は冬休み2週間が明けての登校。「キャー久しぶり〜」という元気な挨拶と「お〜」といった夜更かしで疲れきった挨拶が聞こえました。8時前ごろから緊張したSISの生徒とバディーが自転車やバス、車などで登校しました。8時45分 体育館で始業式。式で挨拶をすることになりました。やっぱりSISの生徒！何だかんだと言っても13人とも数百人の生徒の前で一人ひとり挨拶しました。(加納)

Narangba Valley

Narangbaのほうは、挨拶などなしに、Buddyとともに授業に参加をしました。11時からのSISの生徒だけの集まりでは、みんなの元気な顔を見ることができました。「困ったことは何かある？」と聞くと、ホストファミリーの人が親切なので、恐縮して困るというような声が聞こえまし

た。この二日間は、ホストファミリーやバディーと買い物に行ったり、一緒にスポーツをしたり、DVDを見たり、ゲームをしたり、いろいろな過ごし方をしたようです。英語が速くて理解するのが大変で、何回も聞き返してしまう、という感想もよく聞かれました。3週間後、どんなふうにかかっているのか、楽しみです。シアターのようなどころで行われている演劇の授業にお邪魔して、ちょっとしたアクティビティーをして体を動かしました。明日は日本文化のプレゼンです。練習の成果が出るように祈っています。(難波)

7月24日(水) 雨

Narangba Valley

昨日から引き続き、また雨。今日は本降りです。外で食事をしていた生徒たちは、寒そうでした。今日は平尾教頭先生が、Narangbaの先生に囲碁を教える、という企画がありました。本物の碁盤や碁石は重くてもってこれないので、平尾先生は、紙製の碁碁セットを持ってきて、こちらの先生に英語で説明をし、そのあと対戦をされていました。明日は、授業の中で生徒に説明をされることになっています。(難波)

7月29日(火) 晴れ



Sandgate

日本語の授業のお手伝いも、今日の「日本文化の書道の紹介」が最後となりました。明日はバディーと行くSea World、そして明後日がさよならパーティーと残りも少なくなってきました。何人かの子供は、朝からバディーがコンサートに出るので一緒に音楽ホールへバスで行きました。どんなコンサートだったのか明日聞いてみたいと思います。さよならパーティーでは、ホストファミリーと一緒に楽しむジュスチャーゲームを企画しているそうです。そして、一人一言お礼を言い、最後にSISのみんで歌を歌うそうです。(加納)

8月1日(金) 快晴



Sandgate

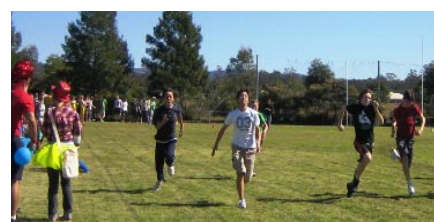
朝から温かく、日中の気温は23度以上まで上がったようです。最終日の学校では、それぞれが思い出の写真を友達と撮ったり、お礼の手紙を渡したりと笑顔で一日を過ごしました。休み時間にはバイク(自転車)のプロモーションが校庭の一角であったので、演技を観ながらバディーと時間を過ごしていた子供もいました。

今日は、女の子たちはSGのユニフォームを着て登校していたため、SGに溶け込んでしまっていて探すことが大変でした。男の子たちも思い思いの友達と最後の日を過ごしていました。(加納)



Narangba Valley

学校は今日が最後ですが、今日は授業がなく、Athletics Carnivalといって、運動会のようなものがありました。運動場のあちこちに、陸上競技の場所が設けられ、それぞれの場所について、競技をして回ります。全体にリラックスした雰囲気で、ハウスシステムとって、赤チームとか緑チームに分かれるのですが、ほかのチームとの戦い、というような感じはまったくありません。下の写真では、SISの二人の男子生徒が100m走に参加してがんばりました。(難波)



<2008 サマーキャンプ報告>

里山家族とフィールドレンジャープログラム

田中 守
理科

2泊3日のキャンプ『里山家族』の参加者は、7年生全員と高校生17名のフィールドレンジャー。場所は大阪南部の紀泉わいわい村、里山の中に昔の農家を再現した宿泊施設です。調理はへっついさん(かまど)と七輪。お風呂は五右衛門風呂。囲炉裏をきった部屋もあります。高校生のペアレンツと7年生がファミリーを作り、高校生のスタッフが活動を支えます。プログラムは高校生達が1ヶ月かけて準備したものです。7年生と高校生が力を合わせて、本当に楽しい3日間になりました。(田中 守)

【名言集】(7年生の感想文から) ◇不慣れた生活だったけれど、昔の人々の工夫や知恵、そして苦労を知りました。◇ふつうの時よりごはんを食べれる事がうれしく感じた。◇自然にかこまれるのが気持ちよかったです。◇楽しかったのは川遊びです。ふだん川というのは「危険入るな」と書かれています。◇カエルが鳴いてぜんぜん眠れなかった。◇おもしろくなさそうだな思っていた子が、一緒にいるとすごくおもしろくて楽しくてびっくりしました。◇自分たちが苦労してできたもの(食事)がこんなに『ウマイ』とは思っていませんでした。◇ムカデも出たけど、みんなで力を合わせて殺したのがすごかった。◇自分たちが作った料理が母さんのよりおいしく感じました。◇五右衛門風呂が一番楽しかったです。ある意味ハマりました。◇本当の家族みたいだなーと思いました。◇川遊びとはいいもんやと思いました。◇このキャンプで7年の友達と新しい友情を築き、たくさんのレンジャーと出会えてとてもいい夏休みのスタートとなりました。◇上級生がやさしいとわかったので、これからもいっぱい手を振って友達になれるようがんばりたいです。◇あまり話したことの無い人とも、話せた。仲良くなれたかも。◇レンジャーの人たちというと、とても楽しいし心が和みます。◇一番楽しかったことは・・・全部!!

【名言集】(高校生の感想文から) ◇子供たちが笑ってくれている姿がこんな

にもうれしいことなんやなあ〜◇この今の達成感を決して自分だけで得られなくて、みんながいてこそ感じるものだ。◇ほんとにこのキャンプで「I love 7年生」になりました。◇これから先の自分を大きく左右するぐらい大きな体験でした。◇計画する事が多すぎて頭が爆発しそうになった・・・◇だんだんこのたいへんさを楽しいと思うようになっていく自分に気づきました。

今年の里山家族のモットーは、「新しいことにチャレンジすること」だった。私は、10年生の頃からこのキャンプのフォレストレンジャー・フィールドレンジャーとして3年間参加している。今年は、12年生ということもあり里山家族のヘッドとして企画・運営を12年の津高毬絵さんと一緒に担当した。毎年、参加するレンジャーによって違うこのキャンプをどのようにして今年度のレンジャーのカラーを出せばいいだろうと考えた結果、このモットーに決定した。去年から「森のキャンプ」から「里山家族」に変わったこのキャンプの可能性を最大限に広げるためには、このモットーが最適だと考えたからだ。去年の「里山家族」は、私にとって視察だった。どのような場所で、何が出来るのかとプログラムを進めつつ、レンジャー、キャンパー全員が新しい場所に興味津々だった。しかし、今年は「第2回目里山家族」だ。第1回目と同じでは、意味がない。このモットーを頭に入れつつ、プログラムのアイデアをだしていった。(中略)この「里山家族」では、たくさん学んだ。そして、信頼できる仲間ができた。誰も「私のほうがしんどい。」「私が1番大変!!!」など全く言わず、よく私の頼りない支持を聞いて動いてくれたと思う。ここでは、このメンバーにしか味わえない独特の達成感がある。このキャンプを3年間続けてよかったと思う。毎年、自分の欠点が見えるので自分のすべきことを見出せるこのキャンプでは、今年も2回ほど壁にぶつかった。だが、しかしその分、私は成長できたと思う。これからは「里山家族」の可能性を広げていって欲しい。(12年 岩村果奈)

7月30日～8月2日に行われた里山家

族 2008は無事終了した。このキャンプには、田中先生による案内にあるとおり、生半可な気持ちではやり遂げることが出来ないほど、大変な日々が待っている。しかし、その苦労以上に大切な何かを得る事ができる、そんなキャンプでもある。その里山家族のすべてが終わった瞬間、達成感と「家族」の離散?の事実、嬉しいやら悲しいやらで、私は涙を流さずにはいらなかった。一番印象に残っている事は、キャンパーやレンジャーの成長ぶりであろう。特に、1ヶ月間苦楽を共にしてきたレンジャーの成長ぶりは、感動的であった。7年生を迎える前日まで、彼らに若干不安な気持ちを抱いてしまふほど、のんびりとしていたが、帰る時になればもうそんな事は無かった。リーダーシップを身につけたり、里山家族の頼りになるお兄さんお姉さんになったり、次を考える事が出来るようになったり、自身の持つ才能を開花させたり、オーラをまとったりと、素晴らしい成長ぶりを肌で感じる事ができた。ひとつ心残りなのが、私の実力不足で支障をきたした点が、たくさん思い浮かぶ事である。仕事が一部のレンジャーに偏ってしまった事や、とっさの判断が上手く出来なかった事などなど、数えたらきりが無い。これらを修正するには何をすればいいのか、次を見て考えなければならぬ。(12年 津高毬絵)

キャンプを終えて、振り返ってみると、一度では言い切れないたくさんの思い出と言葉では言い表せられないこの達成感が、胸いっぱい広がってきます。(中略) 私は小さい時から人前で話す事が苦手で、7年生の前で自分は何が出来たかな?何を話してあげられるかな?必要事項はしっかり言えるかな?と、不安でいっぱいでした。しかしぎ本番になってみると、自分も驚く程たくさんの指示を出し、大きな声を張り上げてみんなの名前を呼ぶ自分に、圧倒されました。自分のFamilyの子に頼られているという感覚がヒシヒシと伝わってきて、それでまた『それに答えないと!』と、疲れた体を奮い起こして頑張れました。7年生が1日目に来れなかった事を、2日目には出来



ようになっていく姿を見ていると、まるで本当の親になった気分になり、あの喉が痛くなるまで教えてあげて良かったな、いっぱい走り回って良かったなと思いました。リーダーとしての責任を果たそうとするその気持ちが、新たな自信となる力を出してくれたように思います。何事をするにも目標に向かって、仲間と心を1つにすることが、成功へ導いてくれると実感しました。

レンジャーを見つけるとなぜか力が湧いてくる、困った時には励ましてくれる、楽しい時は一緒にしゃいで、悩みはみんなで解決する、まるで本当の家族の様に一つの事を乗り越えていく、その関係が、1ヶ月の間に固く結ばれました。苦しかったからこそ味わえる喜びは、このキャンプに参加しないと分からないと思います！！このキャンプは、普段経験したことない事を通して、今まで知らなかった自分を知ることが出来るキャンプだと思います。私たちが卒業してからも、1人でも多くの後輩がこのキャンプに参加し、新たな自分を発見してもらいたいと思います。1つの事を最後までやり切ることによって、継続は力になるんだという事を、自ら実感して貰いたいと心から強く思います。私にとって最初で最後だったこのキャンプは、この夏の最高の思い出となりました。(12年 田口佳子)

1ヶ月間のミーティングと3泊4日のキャンプ。私はたくさんの事を学ぶことができました。最初は軽い気持ちで参加したこのキャンプ。でも12年生だけでやる初めてのミーティングで、2日目のプログラムをまかされた時に今までになかった責任感が出てきました。「やるからには去年よりも頑張らな！」という気持ちと「うちにこんな出来るんかな…」という不安がありました。そしてキャンプ参加者で

やる初めてのミーティング。初めて会う子や知ってるけど話した事のない子が多くて、このメンバーでうまくいか正直不安でした。しかし段々ミーティングを重ねていくうちに、メンバーにもなれ、不安な気持ちは自然になくなっていきました。そんなミーティングのなかで、私は2つの事に自信をもてるようになりました。それは人の前で話す、発表する力と自分が中心になってプログラムを作っているという自信です。前まで私は人の前で発表する事が大の苦手な、授業中の発言でさえ緊張していました。しかしミーティングで毎日発言することによって、この緊張はだんだんなくなり、気がついたらミーティング以外にも発言する事にあまり緊張しなくなっていました。そしてプログラムを作っていく自信。自分でプログラムを作るのは初めてだったので、不安もたくさんありました。でもみんなの力を借りて、大きなプログラムを作るのは楽しかったし、やれば出来るんだと実感しました。(中略) こうして終わったキャンプ。7年生の可愛い友達もでき、すごく楽しかったです。このキャンプで本当にたくさんのことを学びました。でも一番わたしにとって大切な事を教えてくれたのは里山家族のみんなです。みんな支え合って、一つになって、誰かが困っているときは助けて、みんな優しく楽しい子ばかりでした。みんながいなかったらプログラムもキャンプも成長しなかったです。2日目プログラムみんな特にありがとう！うちだけじゃなくてみんなの支えと助けがあったからこそ最高のプログラムになりました！里山家族をやった本当に良かったです。こんなに色々な事を得たことに感謝しています。(12年 浦上優)

7年のときに参加したフォレストキャンプ。それが今回、私がこのキャンプに参加しようと思ったきっかけです。7年の私にとって、何でもできて引っ張っていついてくれているレンジャーの人達は、本当に大きくて私もこんな人達になりたい！という憧れの存在でした。そしてその思いを抱えたまま私はいつのまにか12年になり、5月ごろにキャンプの募集が始まりました。12年になったら参加すると10年のころから決めていた心の旅とこのフィー

ルドレンジャーのどっちにするか、そして受験生なのにキャンプに参加していいのかわからなくて迷っていたとき、「私が大きくなったら必ずレンジャーになるね！」とレンジャーと約束した7年の自分を思い出してこれが最後のチャンスだ！と思ってこのフィールドレンジャーに参加しようときめました。(中略) 私は頼りないスタッフでみんなに迷惑かけてたと思います。でも私がみんなを必要としているように、少しでもみんなが私を必要としてくれるようにと思ってこのキャンプ中過ごしてきました。最初のほうは何を今したらいいのかわからなくて突っ立ったときもあったけど、周りの状況を理解してその場で何が私にできるのかという事を考えて動けるようになったのは、私にとって大きな成長だと感じます。この事はプレキャンのときに果奈と田中先生が言ってくれた”誰かがやってくれると思ってやらないんじゃないかと自分がやる”という言葉があったからこそできたものです。この言葉に私は大きなパワーをもらいました。他にも果奈からのキャンプを受験があるのにやっていたかと迷っていたとき「今やからこそやんねんで」っていう言葉には衝撃を受けました。毬絵にはانسケを使ってプログラムの相談をさせてもらったり励ましてもらったり、キャンプ中もいっぱい元気をもらいました。一ヶ月間のミーティングのときもなかなかうまくいかなくて、自分が悔しくて落ち込んだりしているのを励ましてくれたのも毬絵でした。他にもいつも疲れて本部にくると笑顔で迎えてくれたスタッフのみんな。時々スタッフと本部でのおしゃべりや相談は私の癒しで、またみんなががんばっている私もがんばらなっと思ったり、何かその人の力になりたいと素直に思えました。ペアレントのみんなもキャンパーと過ごして疲れてるはずなのに「元気？」とか聞いてくれたり笑顔で挨拶してくれて本当に支えになりました。このキャンプは普通に生活してたら絶対学べないようなことがいっぱいです。いっぱいいろいろなことをいろいろな人から学べ、いろいろなことを吸収できました。今思うとしんどかった一ヶ月間もいい経験です。このキャンプはみんながいて支えあってこそできたキャンプです。みんなが不可欠な存在です。(12年 高瀬萌子)

海洋キャンプ

相良宗孝
保健体育科

8回目となる海洋キャンプは、今年も徳島県阿南市にあるYMCA 阿南海洋センターで34名の中高生と中村、ダッタ、増尾、相良という4人の教員合わせて38名で4日間の日程で行われました。

毎年この時期は、天候が不安定ですが、今年ほとんど雨が無くすべてのプログラムが順調に行われました。

初日は到着、昼食後、チームでのカヤック遊びをしました。バスでの長旅にもかかわらず、みなさん元気が有り余っているようで、大はしゃぎでした。2日目はヨットやカッターの講習を楽しみました。特にカッターでは、3艇に分かれて乗り込み、それぞれの船が力を合わせ、指導員も驚く速さ（1時間20分）無人島1周という快挙を成し遂げました。3日目にはカヌーで無人島に上陸し、磯遊びやホットドッグ作り、すいか割りなどを楽しみ、さらにはその後センターに戻って再びカヤックというハードなメニュー。今度は全員に1人1艇が与えられてのシーカヤッキング、自由時間には皆で落としあいを楽しみました。ここぞとばかりに相良艇に猛攻撃をかけた皆のうれしそうな目は一生忘れません。特に自分の船から捨て身で飛び込んでくる特攻隊攻撃を見せたAS君には何度やられたかわかりません。そして4日目は石に絵を描くストーンペインティング。ここでは、すばらしいお弁当とキリンレモンを見事に完成させた、KS君の才能に驚かされました。そのほか、毎晩リーダーが考案したレクリエーションがあり、本当に充実した日程で今年も大成功に終わりました。それでは以下に、海洋キャンプのリーダーのコメントを紹介します。

為岡稚子
高等部2年

私は今年、海洋キャンプに参加してたくさん良い思い出ができました。でも今振り返ってみると、自分1人では絶対に出来なかったと思うようなことばかりです。

最初のミーティングで今年のリーダーのメンバーを知ったとき、「このメンバーなら上手くやっっていけそうだな」と思いました。みんなすごくやる気があって、係

りを決めるときもみんなで協力しあって短時間で決めることができました。でもあまりにもしっかりしていたせいか、意見がたくさんありすぎてまとめているのが大変だったこともありました。その後も、みんなが必死になってどうやったらキャンパーと仲良くなれるか、楽しませてあげられるかという事を考えてくれて、とても充実したミーティングでスタートしました。

キャンパーとの顔合わせの日、今まで少人数でまとまっていたクラスの中に元気でじっとしていられないキャンパーの子たちが集まりました。それまでは、失敗してもやさしく接してしてくれた10年生・11年生のリーダーでしたが、みんなをまとめるだけでも一苦労だった私は、しっかりしないといけないなと改めて思いました。それからのミーティングもたくさんの人たちから助けをもらって無事に初日を迎えることができました。

キャンプ初日は遅刻した人もなく、予定よりも早くバスに乗り込むことができました。バスの中でも、「少しは静かにしろ」と先生に言われてしまうぐらいにぎやかで、楽しく現地に向かうことができました。そんな中きっちり予定通りに行動できたのも、途中の休憩でどのリーダーもしっかり時間を守り報告ができたからだと思います。キャンプ場についての時間も大きな問題もなく過ぎていきました。リーダーが率先してメンバーをまとめていたり、はじめをつけて、「話を聞くとき」と「遊ぶとき」の区別をしていたからだと思えました。

日が経つに連れて私達も慣れてきてしまい、キャンパーと同じように夢中になっていたこともありました。悪いように言うともう少し時間にきっちりできたら良かったなと思いました。毎回先生方に言われないとご飯の準備に遅れてしまっていたことも、もう少しリーダーとして時間にも気を付けていたら良かったなと思いました。反対に良いように言うと、今までキャンパーとリーダーとの間にあった壁が少しずつなくなっていくのが感じられました。それまでは、リーダーが一方向的に指示してそれにキャンパーが従うという感じでしたが、キャンパーが進んで手伝ってくれ、自分も何回もあってどんどん良くなって



きたなと思いました。

私はこのキャンプを通じて最初にも言いましたが、みんなで行ったから出来たことがたくさんあると思いました。時間のかかるしお作り、レクリエーションの企画、キャンパーをきっちりまとめてくれたグループリーダー、そして私達の企画を手伝って下さった先生方、スタッフの方々がいたからこんな良い思い出があるんだなと思いました。正直、キャンプに行く前までは、初のリーダーでみんなをまとめていけるかとても不安でした。ミーティングでは失敗してばかりで、キャンプ場に行ったらどうなるかなど予想もつきませんでした。でもそんな私を支えてくれたのがリーダーのみんなでした。私がすっかり忘れていたことを思い出させてくれたり、理解不足のところを説明してくれたりしてみんながいなかったら全く話が進まなかったと思います。それに、私がしつこいぐらい送るミーティングのメールに毎回「ありがとう」と言ってくれたり、ミーティングの時に「私も手伝おうか?」と声をかけてくれたりして、毎回とても嬉しかったです。それに、キャンプ場でも気が付いたことがありました。それは、みんな自分の事よりも先に他の人の手伝いをしていた事です。例えば、ご飯の準備に時間がかかっている班があれば他の班の人が進んで手伝ってあげていることや、脱水機の物が置きっぱなしになっていたなら、わざわざ持っていったりあげるなど、一人一人が小さなことでも気が付いて協力して4日間を過ごせたと思います。自分では気が付いていないかもしれないけれど、他にもたくさん良い事がありました。今年の海洋キャンプの思い出を忘れないように、また来年もリーダーとして頑張れたらいいなと思いました。そしてキャンパーの子たちは、今年の海洋キャンプで学んだたくさん大切な事をこれから活かして行ってほしいなと思います。4日間ありがとうございました。

モクモクファーム体験キャンプ

自然の中での楽しさ

バロリア, ティナ

中等部2年

私達8年生は、今年、7年生の時と違って行きたいキャンプを自分達で選択できました。そこで私は、リストの一覧から、モクモクファーム体験キャンプというのを選択しました。私は、「キャンプ紹介ビデオ」というのを見た時にすぐに、このキャンプに行きたいと思いました。恥ずかしい理由なのですが、一番の目的は、「食べ物」だったんです。私は食いしん坊なので、「食べ物が新鮮でおいしい」と聞いただけで、これが私の望んでいるものだと思います。私は昔から牧場が好きだったので、その理由でこのキャンプを選んだのもあります。私達は夏休みが始まって2日目の日に出発しました。モクモクファームに着いた時に、私は広がる自然に感激してしまいました。ファーム散策をして自分達で行動できる時間も、みんなでわいわい楽しみながら散策しました。宿泊した部屋は、ロフトがあったりと豪華な部屋でとてもキャンプで泊まる部屋だとは思えないくらいでした。皆でテレビを見たりと、楽しかったです。農場に行くとブドウが虫に食べられないようにカバーしたり、ジャガイモ掘りもしました。みんなに、「ティナ将来農場で働いたら??」などとも言われ、少し考えたりもしました。最終日、私達はすごく寂しく、何でこんなに短いのだろうと思うほどでした。すごくいい思い出作りが出来たと思っています。「モクモクファームのみなさんどうもありがとうございました!!」

命をモクモク モクモクファーム体験キャンプ

佐田毬絵

中等部2年

この夏私が参加したキャンプは『モクモクファーム体験キャンプ』です。最初、志垣先生がおっしゃっていた『食物へのこだわり、食物への感謝』というものは、大切なものだろう、とはわかっていましたがあまり実感がわきませんでした。けれど、モクモクから帰ってきたいまでは、先生がこだわっていらしたことが、少しわかるような気がします。これから、牧場体験を主に体験してきた

大切なことを、お伝えできればいいなと思います。

キャンプ初日から、私たちはジャージー牛の牧場で、仕事を手伝わさせていただきました。牧場にはたくさん乳牛と、子牛がいました。私は牛の餌を食べたり、搾乳したり、牛と触れ合ったりしました。自分も牛になったつもりで牛に接してみたりして、すぐのんびり過ごしました。その中で、私は子牛にミルクをあげました。その子牛は『アビゲーター』（アリゲーターの間違いか？）という名前です。私は『アビちゃん』と呼んでいました。彼女は私にとってもなついてくれました。ほんとうにかわいく甘えてきてくれて、すごく嬉しかったです。

けれど、彼女は黒い牛でした。黒毛の和牛でした。牛は人間の経済動物です。ほとんどの牛には父親がいません。悪い言い方ですが人工的に産まれてきた命なのです。彼らの寿命は人間が決めて、彼らの生き方は酪農家に生まれた時から乳牛になるか食用になるかしかないのです。アビちゃんは伊賀牛になるそうです。つまり、他のジャージー牛のように搾乳用に育てられるわけではないということです。食用牛になって、アビちゃんの命は私達が食べる市場に出回ることになります。私はそれを知った時、泣きそうになるくらい悲しくなりました。でも、それが『命をいただく、命に感謝する』ということだと思います。

乳牛が一生の中で私たちに与えてくれる牛乳は約20トンだそうです。彼らが生きられる年数は6~7年間です。年をとるとミルクの質も落ちるので、7歳くらいが乳牛として限界なのです。彼らが生きる時間とミルクの量を計算すると、10の牛



乳に乳牛2時間半ぶんの命が使われています。10のミルクを捨てると、彼らの命を捨てたことになるのです。これも、『命をいただく、命に感謝する』だと思います。

この経済動物の話聞いて、牛の大切な命を人間は道具のように使っているのだなと思い、とても残念でした。人間と牛の命の尊さは変わらないのに、なぜ人間は人間の都合で動物から動物らしく生きる権利を奪うのか、とても納得できません。でも、私たちは彼らと与えてくれるさまざまな恵みがないと生きていけないのだし、牛たちも、牧場の人たちの世話がなければ成長できなかった、という持ちつ持たれつの関係が成り立っていることを認めざるを得ませんでした。そして私は彼らが命を削って与えてくれる大事な恵みを粗末にすることはやめようと思いました。

人間の命は沢山の他の命から成り立っていることを、忘れてほしくないのです。今回すばらしいキャンプに行くことができて、本当にうれしく思っています。ありがとうございました。



チャレンジキャンプ

平井太佳子
保健体育科

参加者8年生から12年生、17名。学年も性別もバラバラ。同じ学校の生徒だけでなく、あまり良く知らない者が集まって大自然の中で仲間とともにチャレンジし、自分を見つめるプログラム。

6月29日 新大阪発 青木湖にてイカダ作り、イカダで青木湖横断

6月30日 白馬岳登山 猿倉～大雪溪～山頂下のキャンプ場

7月1日 白馬岳登山 山頂下のキャンプ場～山頂～小蓮華～白馬大池～蓮華温泉

7月2日 10キロマラソン 新大阪帰着

声
*最初はほとんど会話をしなかったけど、だんだんチームの人とコミュニケーションは取れてきたし、やっぱりこれは一緒にチャレンジしてきたからだと思う。そして、理由はないけどこのチームなんだかすごいと思えてきた。*友達とかが何かに熱くなっているのをうらやましいと思っていたのですが、このキャンプでいろんなことにチャレンジして最後まで頑張っていたので、何かのきっかけにつながったと思います。*上から自分が登って来た道を見下ろして初めてこれだけ歩いたんだ、という気持ちを実感しました。*この4日間は、本当に自分にチャレンジすることができて、色々な方向から自分を見ることや知ることができた。*3日目、山の頂上に行くときにす

にチームが団結しているように思われました。私はそのとき昨日の反省が生かされているなあと思いました。*グループの行動というのはまとまっていないときには嫌になってしまうことも

あるけど、今回の様にひとりひとりの気持ち一つになることができたなら、強いんだなあと感じました。*思っていたよりぜんぜんきつく、死ぬかとも思ってしまいました。でも、結果的にはすごくいい経験であり、楽しかったです。*自分だけのことを考えても、ほかの仲間にとってやりづらかったり、「チーム」というよりも個人のチャレンジになってしまう。仲間のことを理解し、意見を受け入れること。たとえ自分がその案が嫌でもひよっとしたらそのプランはやりやすかったり、スムーズにモノを進めることもできるかもしれない。*このチャレンジキャンプ4日間を通して、僕はなんだか精神的にも肉体的にも強くなったと思う。*こんなにきついことができるんだあ～と感動！*一番良かったことは、1日目にできなかった協力やOBS（アウトワード・バウンド・スクール）のひとと知り合いになれたこと。3県をまたいだこと（長野県、富山県、新潟県）。それと日本海に足を入れられたこと。温泉に入ったこと。最後に毎日恒例の“気持ち”をいえたこと。*他人のことを考え



て行動すると、すごく疲れる。でも、それをしないのもっと疲れる。自分がしんどい時は相手もしんどい。なら、そのときに自分が何をできるか、他人のことばかりで自分のことがおろそかになるのはアカンと思うけど、自分のことばかりじゃどうにもならない。*声はみんなが出しているの、自分はいいと思い、小さな声しか出さず水を必死にこいでいました。しかし、今思ってみると大きな声を出した方ムードなどを上げることができたと思います。*こんな短い時間で知らなかった人とすぐなじめたのはすごいと思いました。*仲間とチャレンジしてみて気づいたことは、遠慮していたら何も進まないんだ、ということ。*大自然の中でみんなと生活して、変わっていったりすることがとても楽しかったり、嬉しかったです。*しかし実際登ってみると一日目で自信が打ち砕かれました。想像を超えた辛さを感じ、最後までいけるのだろうか？などと思いました。しかし、中2の女の子まで頑張っているにも関わらず、あきらめる訳には行かないと思い、全力を尽くしました。

学校説明会のお知らせ

参加型公開授業（Participation Day）のご案内

入学センター（アドミッションズオフィス）

10月11日（土）10:00～ 大迫校長による授業の紹介 10:45～11:45 公開授業
予定されている授業

■4・5年生向け 音楽（コーラス）・美術・理科

*本校教員が、本校の施設を使って4・5年生向けの楽しいアクティビティの形での授業を提供します。

■6年生から中学3年生向け 音楽（楽器）・物理・化学・数学・国語・英語（英語圏からの帰国生向け）

*SISにおいて実際に行われている授業のそのまますを体験していただきます。

◇受付は全て開始の30分前から始めます。

◇事前予約は必要ありません。当日受付にてお申し込みいただきます。

◇授業の希望者が定員を上回った場合、先着順ではなく、抽選で決めさせていただきます。（全員がいずれかの授業を受けていただけるように努力いたしますが、不可能な場合には授業見学をお願いすることもあるかもしれません。）

ドルフィンスイムキャンプ

合志智子
情報科

今年のドルフィンスイムキャンプは、参加者12名と引率教員馬場、合志の2名で実施しました。前日までは天気が悪く、大阪から和歌山方面への高速道路が大雨のため通行止めになったりしていたようですが、今年も実施の3日間は天候に恵まれ、順調にプログラムを進めることができました。1日目に串本のダイビングパークでシュノーケリングをして、サンゴや魚など海の生き物を観察します。今年のダイビングポイントは昨年とは違い、2年ぶりの場所でした。この2年の間にずいぶんサンゴが増え、成長し、魚も多く見られるようになっていました。これは串本の海の環境をしっかりと守るため、外敵(オニヒトデ等)の駆除などをボランティア体制で進める地道な活動の結果ではあるのですが、和歌山という場所で熱帯性のサンゴや魚がどんどん増えるということは、やはり地球温暖化の影響が強く出ているとの話を、このサンゴの海を守っている串本海中公園の方から聞きました。

2日目のプログラムの太地でのドルフィンスイムでは、これまでと違って少人数で参加したためか、イルカたちがとてもやる気満々でした。いつもはたくさん生徒たちに驚くのか、2つのグループに分けて参加するので2回続けての出演に疲れるのか、あまりしつこくイルカを追いかけると、海の深いところへ潜って隠れてしまったり、勝手に仲間内でジャンプを始めたこともありました。今年イルカを追いかけずじっとしていても、イルカの方から何度も遊びに誘ってきました。生徒の皆さんも、今年のイルカとは十分親しめたと思います。

3日目の朝には、串本のサンゴの海を観察できる半潜水船に乗るプログラムがあります。梅雨の時期は強風のため3日のうち1日程度しか運行できない船なのですが、このキャンプの3回目の実施の今年に、初めて乗船できました。貸しきり状態でゆったり乗って出航しましたが、あまりにも一生懸命海の様子を見つめ過ぎたためでしょうか、途中気分が悪くなる生徒が甲板へと出て行きました。シュ



ノーケリングでは見ることのできない海岸から遠く離れた場所まで行ってくれるので、自分で潜った時とはまた違う海の風景を楽しめたことと思います。

ドルフィンキャンプを終えて

中尾千里
高等部2年

今年私はドルフィンスイムキャンプに参加した。2泊3日のキャンプでメンバーはたったの12人という少人数でのキャンプだったが、私は素晴らしい3日間を過ごすことが出来た。

6月30日、12人が学校で集合してスクールバスに乗り込み出発した。目的地は和歌山県の串本海中公園。到着してすぐにサンゴの話聞いて、早速シュノーケリング。慣れないウェットスーツを着ることで苦戦したが、そんなことなど忘れさせてくれるほど海はとても心地よく、きれいだった。何度も間違っって海の水を飲んでしまいいながらも、水面から顔を離すことができないほどだった。サンゴをとて近くで見ることができて、カクレマノミやソラスズメダイ、ナマコなどの生き物も観察することができた。

そして次の日、7月1日。朝から水族館に行きひと回りした後、水族館の裏側を見せてもらった。魚にえさをやったり、ヒトデやナマコを触ったり、海がめを持たせてもらうなど普通では体験できないことをたくさんさせてもらった。また来館者として水槽の外側から見る魚たちとは違う一面を知ることができた。水族館でおいしい食事をとった後は、いよいよキャンプの目玉、ドルフィンスイム。合計9頭ほどのイルカが私たちを歓迎してくれた。イ

ルカたちはとても可愛く、フレンドリーで、私はすぐにイルカのとりこになった。イルカたちと触れ合った後は、自由時間。イルカ達と自由に遊べる時間だ。まるで「遊ぼう!」と言っているかのように、水面に来て私たちに愛嬌をふりまいてくれた。そんな楽しい時間は瞬間に過ぎて、イルカたちとお別れする時間。名残惜しく感じながらも次の予定、夜の水族館見学に向かった。夜の水族館では、昼に見たものとはまた違う感じを味わうことができた。

7月2日、最後の日。この日は、海中観光船ステラマリスに乗った。このステラマリスは天候や風に影響をうけるため欠航になることも多く、去年も一昨年も欠航だったのだが、私たちは幸いにも乗ることができた。ステラマリスでは船の地下に座ることが出来て、そこから海の中の生き物を観察することができる。私は船酔いをしてしまってほとんどの時間を甲板で過ごすことになってしまったのだが、それもそれで周りの景色を楽しむことができた。

3日間は長いようで本当にあっという間に過ぎてしまった。メンバーは少なかったが、少なかったからこそ全員が仲良くなれて、1つの素晴らしいキャンプを作り出すことが出来たのだと思う。そして、3日間キャンプを支えていただいた先生方にもとても感謝している。このキャンプはイルカと友達になれるだけでなく、海を身近に感じるができる魅力あふれるキャンプなので、機会があれば是非参加することをお勧めする。

国際交流農業キャンプ

国際交流農業キャンプをふりかえって

宮前あゆか
高等部2年

食べ物を粗末にはしてはいけません。こんな注意を耳にしたことは誰でもあると思います。この聞き慣れたフレーズの意味を知っていると思っていた私が、夏休みに国際交流農業キャンプに参加して、もっと深い意味合いがあることに気がきました。

このキャンプでは、担当の井藤先生、福島先生、真砂先生を合わせて30人もの大勢のメンバーで、栃木県のアジア学院へ向かいました。そこで、研修生のみなさんと農作業や家畜の世話をしたりと、慣れない仕事を一生懸命こなしました。早朝からの活動は決して楽だとはいえませんが、みんなで除草をしてきれいになった畑を眺めた時の達成感はとても心地よく、自然と笑顔になれました。

私にとってこのキャンプで印象強かったことはブッチャリング（鶏の屠殺）でした。鶏が息をひきとる最後まで、あんな間近で見たのは今までにない経験だったので衝撃的でした。死を目の前に鳴き声をあげる鶏。死んでいく鶏の、苦しさを訴えるような目。そんな状況を私は忘れることができません。最初はただ単に面白いそうだとか、見たくないと感じていましたが、私たちが食べ物を口にしていく上で理解すべき、大切なレッスンだったと思います。その後おこなったワークショップではみんなで「幸せな食卓って何だろう？」をテーマにそれぞれの意見を交わしました。食べるということは身近なことであり

ながら食べ物の大切さや命の大切さについて、その日以上に真剣に考えたことがなかったと思います。ただ残さず食べるのではなく、ありがたく、食べることを可能にしてくれた命に対する感謝をどこか自分の中で持ちながらおいしく

いただくことが、食べ物を粗末にしない上で重要なキーになっているのだと私は思いました。

たった四日間のキャンプでしたが、日が昇ってから沈むまでみんなで力を降り注いで行った農作業のおかげもあって、元気に育ってくれるであろう農作物のことを思うとがんばったかいがあったなあと思うことができます。このキャンプで、メンバーと仲良くなれたことや、楽しい思い出がつくれたことだけでなく、自分達で活動し、新しい経験を通して食に関する理解を深められたことをとてもうれしく思っています。

中矢来美
高等部2年

私はこの前のサマーキャンプで国際農業キャンプに行きました。アジア学院との交流もあったため、前もってその国のことについて調べました。そしてキャンプメンバーみんなの前でプレゼンをしました。メンバーにはいろんな学年からきていて、仲良くなれるのかととても心配でした。キャンプ当日はそんなに遅刻する人は少なく、時間通りに新幹線に乗ることができて、東京にも無事につきましました。着いてからは浅草見学に行



き、それからアジア学院のある栃木県までバスで行きました。思ったよりも時間がかかって1日目はスケジュールが大幅にずれてしまいました。2日目からの農作業はひたすら草ぬきを朝からずっとしている日が多かったです。その中でも最も印象的なのが、ブッチャリングです。ブッチャリングでは2羽のにわとりを殺しました。まずその2羽を捕まえることから始めました。そのにわとりは捕まえたれたとたんすごく静かになって、私は彼らはこの後何が起こるのかわかってるのかなあって思いました。いっきに一発でぐさぐさナイフで殺すのかと思っていたら、全然違ってまず傷をつけて、血を全部抜いて殺すという方法でした。それはとても見ているのが辛かったです。血がすくなくなってくるとにわとりは口から何かを吐き出したり、ものすごく暴れたりとても苦しそうにしていました。キャンプメンバーのほとんどの人が泣いていました。その後にあった幸せな食卓についてのワークショップでは、みんなのたくさんの食に関する思いを語り合いました。そのことを涙を流しながら話す人、その姿に我慢できずに泣く人、みんなのすてきな思い出を聞くことができました。最後の日のディズニールランドではみんなキャンプの疲れも忘れ、思いっきりはしゃぐことができました。帰りのバスの中には笑い声しか聞こえてきませんでした。このキャンプでは自然の大切さ、食べ物の大切さ、仲間との大切さを学ぶことができました。このキャンプで得た思い出は私の一生の宝なのです。



写真文芸帳作成キャンプ

境目美結 林真希 谷修造
高等部1年

私たちは、写真文芸帳を製作するために、紀伊勝浦と太地へ行ってきました。

6月30日の朝、新大阪駅に7時に集合。朝早かったのと、テスト期間明けで疲れがたまっていたのか、みんな目をこすりながらの出発。

期待を胸に膨らませながら、4時間後に紀伊勝浦に到着。長い電車旅の末、私たちを迎えたのは駅前にある民宿の空っぽのカウンター。駅に着き次第、荷物を預かってもらえることになっていたのだが、のんきというか、宿をあけっぱなしにして出かけているようだった。駅前の広場にある木陰でお弁当を食べ、その後宿に荷物を預けて身軽になった。全員で集合写真を撮った後バスに乗って、いよいよ世界遺産・熊野古道へ。

鬱蒼(うっそう)とした森に入ると、まるでタイムスリップをしたかのように感じられるほど、木々が平安時代と変わらない雰囲気醸し出して、自然の大きさに感動。曇りがかった空の下、大昔の木々に囲まれながら、那智大社へと続く長い石段を登っていく。

しばらくして那智大社が見え、見晴らしのよい山の中腹に出た。那智大社に参拝後、青岸渡寺へと向かった。その一角から那智の滝を一望することができ、さらに近寄ってみると、何トンもの水がすごい勢いで落下する姿に圧倒された。滝道を歩いていると、ぼつぼつと雨が降り始めた。勝浦にいたときは快晴だったので誰も雨具を持っておらず、早足でバス停へ。停留場のお土産店に入ったころには本降りとなり、間一髪で助かった。宿の夕食は、土地ならではの魚の煮付けなどが出て、みな何杯もおかわりしていた。

翌日、朝一番にマグロの朝競(せり)を見に行き、一面に寝かされた数えきれないほどのマグロに驚きながらもカメラにしっかりと収めた。近くには足湯が何か所かあり、まずは朝湯で一休み。その後船で太地へと向かう途中、美しい紀の松島の景観に心を奪われ、自然の大きさを実感。太地では、世界でも珍しい腹びれをもつバンドウイルカを見たり、ク

ジラやイルカ、シャチのショーを見たりして太地の海の世界を満喫。いろいろな景色を撮影後、イルカの観光船で勝浦に戻り、1時間ほど休憩の後、特急「くろしお号」で帰路につき、二日間楽しませてくれた和歌山に別れを告げた。

帰りはそれぞれの駅で流れ解散だったので、全員一緒に解散式はなかったけれど、きっと私たちは6月末日に新大阪で集まった集団よりも幸せそうに見えたことでしょう。翌日から3日間学校に集まり、写真に詩をつけたり感想を書いたり、イラストマップなどを描き、プリントの後製本をして予定通りの日程で、立派な写真文芸帳が完成しました。

盛りだくさんの二日間の後、メンバーはそれぞれ振り返ってこのように語ります。
8-1 宮原「キャンプよりまるで修学旅行のような気分だった」

8-2 岡田「自然の偉大さや、すばらしさが再確認できた」

8-2 矢橋「キャンプの活動すべてが楽しかった」

9-2 伊井「世界遺産、ご飯、博物館、どれもとてもよかったです」

9-3 吉田「都会では味わえないものをあじわえた」

10-1 郁「写真とアルバム作りと、一つのキャンプで二回も楽しめた」

10-1 林「日常生活でなかなか実感できない自然の大きさを体を通して感じとれました」

10-2 美結「これが世界遺産なのだ！これからも守っていかなくちゃ」

10-2 ハウザー「芸術としての写真はやはり違う」

10-3 早川「いっぱい自然、優しいおじさん、初めてのせりなど、出



会いに満ちていました」

10-3 大迫「知らない場所に行き、その人と交流したりした雰囲気が懐かしく感じました」

10-4 谷「もう一度行ってみたいとなるとも新鮮な体験でした」

12-2 高島「世界遺産あり、海あり、食べ物そして16人の笑顔あふれる貴重な二日間でした」

12-2 南川「都会を忘れてしまう、新しい体験でした」

文芸帳は、図書館に1冊寄贈しましたので、ぜひご覧ください。



100km ウォーク

琵琶湖は素晴らしい

土佐礼子

理科

6月29日(日)、JR堅田駅に生徒20名と教師4名、全員集合。幸先良く意気揚々と100km完歩を目指して出発しました。

まずは、感想文より。〈一部抜粋〉

「想像していたよりすごしんどいキャンプでした。1日目は強い雨と風で、靴も服もビショビショになって本当に大変さを感じました。でも暑さはなかったの、今思うと雨でよかったのかなと思います。2日目は気候的にはGOOD!でも足の痛みが増して思うように歩けなくなっていました。しんどさがぜんぜん違って、疲れがたまっているのがわかりました。3日目が何よりもつらかったです!暑い!つらい!日差してすごかつらいですね。でも夜完歩できたときは、もう嬉しくて嬉しくて!!大げさじゃなくて友達と一緒に歩いたから完歩することができたのだと思います!やっぱり支え合い、助け合いは大切です!」

「1日約30km×3日間、ずーっとずーっと歩きっぱなしでした。歩いたり、歩いたり、歩いたり...とにかく1日中同じことばかり。身体もそうでしたが精神的にも苦しいものがありました。3日間に雨あり曇りあり晴れありと、天気はすべて味わうことができ、大変良かったです。20人という沢山の人数でしたが、皆良い空気で時間をすごせていたと思います。」

「100kmがこんなにもつらいと思わなかったし、逆に完歩できるんだというおどろきもあった。このキャンプで一番大事ななと実感したのは”友達”の存在だった。友達がいらない100kmウォークはきっと何倍もしんどいと思う。あらためて友達の大事さも、このキャンプで再確認した。同時に、歩く楽しさも味わえた。周りの景色がゆっくり見れたり、人とふれ合えたり、車や電車では味わえない良さがあった。」

「正直、100キロという距離を甘くみていました。そして歩くことは大半、自分の意思との戦いなのだと思いました。1日目の雨が降ったとき、もうすでに「しんどい、やめたい」と思いましたが、周りに



友達がいるし、先生のごまめなサポートもあって無事3日間乗り切ることができました。みんな同じ痛みを分け合っているのも実感でき、いつもよりお互いを気にかけて、助け合えたと思います。(中略)ほとんどがつかく、痛い記憶ですが今の私の自信の一部になったと思います」

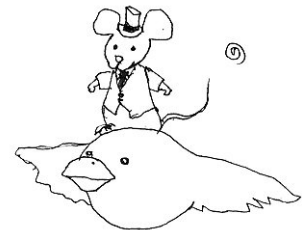
「しんどくても一歩一歩進んで行かなければ終わらない、というプレッシャーと“本当に歩ききれた!”という達成感を味わえてすごく成長できた気持ちになりました。人とあわせるよりも、自分に丁度良いペースを見つけることが大切だと感じました。また民宿の人や、歩いているときに“おはよう”、“どこからきたの?”、“頑張ってるね”などと声をかけてくれた通行人の方々との出会いもあり、皆で頑張った3日間はとても思い出深いキャンプになりました。」

「確かに1日30kmはキツかったけど、自分の知らない自分にたくさん出会えた気がしました。限界と思っている時は多分まだ限界ではない。周りの人たちに支えられながら、周りの景色に感動させられながら、本当にいろんなことを吸収できた気がします。生命力ってすごいなと思った。」

それぞれいろんな発見、気づきがあったようですが、共通しているのは友達との連帯感でした。歩き通すという全く個人的な行為を完成させる中に、周りの人

との共感の重要かを確認させられましたね。教師4人も同じ思いです。高橋先生(チーフディレクターとして、事前の指導に始まって、4日目の100キロ達成への的確なスケジュール変更までのプログラム統括、本当にお疲れ様でした)、田中憲三先生、池田先生、4日間ありがとうございました。車でラクシテいた私をお許してください。

最後にもう一言、感想文の追加です。「100kmをなめていました。もう琵琶湖は見たくないです。」(←誰ですか!)



心の旅

バニヤン マリエ
高等部3年

『ヒートアイランド』という言葉が某CMで使われていた中、12年24人と引率の先生2名の合計26人で心の旅に行ってきました。今年の心の旅参加者は全員が12年という事もあり和気あいあいとした雰囲気の中で行われたのではないかと思います。12年といえば、蟬の鳴き声と同じぐらい耳障りな言葉『受験』というものがありますが、この心の旅では受験や進路、将来などに対する不安を和らげる為、またはじっくりと自分の心と向き合う時間を設ける、そして友人と語り合う為の夏のキャンプでもあります。さて、私たちは6月30日～7月3日までの心の旅で3泊4日 和歌山県伊都郡高野山町にある宿坊準別格本山恵光院にお世話になりました。そこはなんとも、静かで落ち着いた雰囲気の流れている場所でした。しかし私には心配事が一つ。お坊さんってスキンヘッドで怖い人...?という勝手な想像を抱いていたが、まったくもってそんな事はありませんでした。どちらかというとその正反対なぐらいに面白く、明るい人々でした。なので、お坊さんも交えてしたゲームなどでは非常に盛り上がりました。でも、やっぱりお寺に修行(又は住み込み)しに行こうという意志がしっかりある人たちだったので、お坊さんと語る時間では貴重な意見を聞けたと思います。そして、何よりも心の旅で嬉しい事と言えば“ゆっくりできる時間”があるということ。確かに、毎日の早起きは辛かったけど、ご飯を終えるといつも自由

時間があり心の旅にふさわしく本当に心の向くままに過ごす事ができました。和菓子屋さんに行くもの、池で鯉をじっと観察するもの、バレーや、サッカーボールで遊ぶもの、寝るもの、卓球するもの、友達のおしゃべりに花をさかすもの。ほんとうに様々な時間の使いかたをしました。『受験』や『勉強』という仕切りのある生活の中でそれは本当に開放感のあるものになりました。その中でも私が一番好きな瞬間はご飯の時間でした。味も最高でしたが、私が言いたいのは食べる事ではなく、皆のぶんのご飯をよそう瞬間でした。畳部屋の一番前でご飯をよそう時に部屋を見渡すと、みんな大きな家族のように感じました。なんとも、暖かさを感じた瞬間でした。と、ここまでは楽しい事ばかりを書きましたが、夏の定番肝試しもしました。肝試しでは、昔の武将や戦死した人々が眠る奥の院の夜道を2人ペアになって歩きました。怖いものが大の苦手な私にとっては恐怖体験以外のなものでもなかったが、思い出の一つになったのは間違いありません。そして夏といえばもう一つ、花火!という事でお坊さんたちと一緒にやりました。色とりどりに飛び交う花火。打ち上げ花火でテン



ションが上がって、線香花火でシンミリして。解き放たれたのは確かに、3泊4日でしかなかったけれど、その時間は私たちの最後の夏のキャンプであり、きっと忘れられないものになるのだろうと思いました。

そして、その後はオリエンテーションで、そのちに数珠作りを行いました。パーツはもう揃っているのを自己流に仕上げるといった感じで、木の玉を荒さが違うサンドペーパーでひたすらに磨きました。この木の玉は磨いている本人の心を現すみたいで、数珠作りを教えてくれた仲前さんは一人一人に、「綺麗な丸になりましたね。あなたはきっといい行いを日々しているんでしょうね。」と暖かい言葉を掛けていました。あまりにも数珠作りに熱中してしまった為、時間をオーバーしてしまいお昼の入浴タイムが無くなったが、みんな世界に一つだけの数珠が誕生した。



職業体験プログラム

Dreams come true 3rd Season

水口 香・山本 靖子

英語科

2年前にどたばたで始まったこのプログラムも早いもので3年目を迎えました。「本当にやれるものなのか。やっていけるのか。」「意味のある体験になっているのだろうか。」そういった質問は担当者にこれまで投げかけられたものであると同時に、担当者自身が自身に投げかけ続けた質問でもありました。しかし、この2年間、そして今年も、プログラム体験後の参加者たちの学び、気づき、成長した姿、それを実際の進路を考える上の参考としてくれたことを知るといった経験の中で、プログラムの存在意義が少しずつ確立されてきているのではと思えるようになってきました。それもこれも、自分で体験先を開拓するという高校生としては大きなチャレンジを受け入れ、また、体験先で出来る限りのものを獲ようと前向きに体験を取り組み、それを自分の意味ある体験とした参加者があつてのことだとしみじみ感じています。また、その気持ちを意気に感じ、受け入れ先を探すために尽力して下さった保護者の方々及び先生方、そして何よりも、快く彼らを受け入れて下さった多くの受け入れ先の方々があつてのことです。ここに、担当者として、心よりお礼を申し上げます。

さて、本年度は12年生から10年生まで幅広い学年の総勢19名が参加しました。このプログラムの一番大きな特徴は、1人1人の生徒が自分の希望にあわせ、体験先を探すことにあります。従って、毎年、様々な職業が選ばれますが、今年も過去2年とまた違う、「国際支援」「臨床心理士」「書籍販売」「動物飼育」「美容師」「ペットショップ」「博物館学芸員」「児童養護」「裁判官」「弁護士」「株取引」「キャビンアテンダント」「パイロット」「ラジオ局DJ」と幅広い職業選択となりました。

毎年体験に入る前に、事前学習の一環として、実際にプロとして活躍されている方から話を聞く講演会が企画されていますが、今年度は翻訳家であり、翻訳を通し幅広く日本文化を海外に紹介されている、ジュリアカーペンター先生、また、

海外青年協力隊職員として、ボリビアへ派遣されておられた舟木律子さんに、それぞれの職業選択の過程や実際の働くということはどうことであるのか、どういふことを求められるのか、仕事の醍醐味といったお話を伺いました。

百聞は一見にしかずー実際の体験を経た参加者たちのレポートほど、このプログラムとは何か物語るものはないと思います。そこで、今年も今回から4回にわたって、生徒の体験レポートを抜粋する形で今年度の内容を報告させていただきます。まず1回目は、航空業界の仕事、客室乗務員及びパイロット研修の報告からの抜粋です。

「JAL」客室乗務員

友長聖良

高等部2年

幼い頃からの夢である、客室乗務員に少しでも近づくため、この職業についてたくさん知りたい、また、今の私でも夢を叶える為に何か出来るのであれば、今の内からやっておきたい、そんな思いから、このプログラムを選びました。

今回お会いして、お話を聞くことができたのは、元JAL客室乗務員として勤務しておられて、現在も空港で重要な顧客を搭乗口まで案内をされている安田さとえさんという方です。彼女はとてもにこやかで、でもその中で落ち着いて物事をきちんと考えて話して下さっているのがとても印象的で、家で考えて来た質問を沢山する事が出来ました。その中で、いくつかをまとめてみます。

まずは理想の客室乗務員像を尋ねてみました。それは、一人一人の乗客の様子をキャッチして様子が変われば即座にそれに気づく事ができ、適切な対応を自分で考えて取ることができる人だとおっしゃいました。これは普段の日常生活の中でも私が心掛けるべきであると思いました。

それから、立ち振る舞い、言葉遣い、といった当然のこと以外に求められるものとは、との問いには、ただ決められた業務を機内でするだけでなく、一つ一つに気持ちを込めてまた同時に責任感も持ち、お客様が快適に過ごす事が出来る様にお手伝いする、そういう事が出来る

事、また、人をまとめる力も大事との事でした。ここでいう人をまとめるとは、他人の考えや意見をも聞き他人を尊重して、他人をバックアップする事も含むそうです。また、高い競争率の中、合格する人はとは自分の長所がわかっており、また、それを最大限に生かしており、アピールできる人であることとのことでした。

最後に飛行機に乗務していた頃の写真を見せていただきましたが、どの写真も素敵な笑顔がとても印象的で、写真を拝見している間、私はさとえさんの様にいつも笑顔で一生懸命お仕事を頑張っておられて、お客様に喜んでもらおうと懸命に仕事に励む、こんな素敵な客室乗務員になれればいいなと思いました。

私は今まで、客室乗務員という職業に対して憧れの部分が強かったです。でも今回この様な貴重な機会を得たことにより、将来の夢についても一度深く考える事が出来ましたし、やはり私は客室乗務員になりたいと改めて強く感じました。

さとえさんに会えた事、お話頂いた事すべてが私の宝物になりました。私がさとえさんに来るお礼は、将来私が立派な客室乗務員になってお客様に素敵な空の旅を提供する事だと思いました。そのために出来る限り頑張ろうと思いました。

「JAL エクスプレス」パイロット研修

大藤早織

高等部1年

今回JALエクスプレスで研修を行うことになったのは、私が将来したい職業で、パイロットになることが第1希望だったからだ。幼い頃から、飛行機がなによりも好きで、飛行機の中で仕事がしたいと思っていた。だからこのプログラムに参加できたことを心からうれしく思ったが、1つ驚きを隠せなかったことは、受け入れ先を自分で見つけなければならぬことだった。いきなり一介の高校生が電話をして、「はい、いいですよ。」とってもらえるわけもないと思うと、不安だった。が、幸運なことに、偶然友人のお父さんがJALで仕事をしており、その伝手で、研修先が決まるだけでなく、私のために研修メニューまで作っていただいた。

(次ページ★に続く)

海辺の生き物観察会

臨海実習に行ってきました

斉藤 数
理科

7年生全員（OIS・SIS）参加の臨海実習が9月17日に実施されました。当日は、台風の影響が心配されましたが、曇り空で雨も降らず、まさに実習にもってこいの天候でした。今年は往復ともバスを使い、車内では、両校の生徒がばらばらになって座りゲームなどをして、7年生どうしの良い交流の場になりました。

現地に到着し説明を聞いてから、生徒たちは手に手に用意した網・ドライバーなどを使って、皆元気いっぱい浅瀬に散らばり生物を探しました。午後になると潮もずいぶん引き、潮溜まりでイソギンチャクやカイメンなどゆっくり観察することができました。またヒトデやクラゲなども捕まえることができ、それぞれなりに生物と遊び、スケッチし、楽しいうちに実習を終えることができました。次は、生徒からの感想文です。

9月17日臨海実習に参加して
谷 春葉

中等部1年

「わあ、すごい！」あちこちから同じ意味のせりふがさまざまな言葉で聞こえてきた。私たちSISとOISの7年生は、みさき公園の一角で浜一帯の生き物を捜し求めている。

道路から砂浜を見下ろしても何も見当たらなかった。けれども、波打ち際に行き海にそろそろと入ってみると、あたり一面に海の生き物がいた。岩の割れ目に1センチくらいの巻貝や緑色や赤茶色の海草があった。午後に潮が引いた後、カニや小さなハゼ、イソギンチャクなども見れた。私の中で特に面白く思ったのは、ヤドカリだった。しばらくじっと潮溜まりを見つめていると、小さな石に見えていたヤドカリたちが、見えてきた。大きさもさまざまで1センチぐらいのものから3センチもあるヤドカリもいた。殻の中はどうなっているのか知りたくなくて、拾い上げてみた。当然のことながら、カドカリは、すぐに殻に入ってしまった。でも、どうしても見てみたいと思いヤドカリを



持ったまま動かずにいると、ひょっこりと頭と足が出てきた。足をじたばたさせているのがとてもかわいらしかった。それから、ちょっとした実験をしてみた。「ヤドカリが危険を感じてからに隠れている時間は、大きいものと小さいものでは違うのか」た。実験結果は、小さいほうが時間が短かった。同時に殻に入って先に顔をのぞかせたのも、小さいヤドカリだった。反応時間はそれぞれ違うけれども大きなヤドカリは、小さなものの3倍近く殻の中にいた。おそらく臆病なヤドカリほど生き残って長く生き、大きくなれたのではないのかと思った。

帰るときはとても残念だった。海にザブザブとはいったことも気持ちよかった。

(★前ページの続き)

研修はほとんどを本社で行い、3、4つぐらいの体験を空港で行った。初日の研修は、社内からで、担当を引き受けてくださった岩本さんに紹介され、訓練に使う「モックアップ」という実物にそっくりの模型を見学したりした後、伊丹空港に移動した。その後は、普段は入れない、エリアに入れてもらい、フライト予定の機長の方と副操縦士の方と一緒に飛行機まで行き、フライト前の機内での作業を見学する機会を得た。キャビンアテンダントとのミーティング後、機長は機械だらけのコックピットの中で、数字や文字を入力したり、整備士と飛行機の状態を話しながら、チェックをしていた。なんと特別にコックピットの中を見せていただく機会も得、うれしくてどきどきしたが、思ったより狭く、四方八方機械だらけだった。機内の中で動き回っているみんなの表情は硬く、さっきまであんなにニコニコと話しかけてくれていた人たちとは別人に見

えた。その後昼食をとり、どうやったらパイロットになれるのか、採用されるのかの説明を聞き、1200人中40人の競争率に、驚いた。また、パイロットの授業風景も見学させてもらった。2日目は、毎月3日と9日にやるイベントに参加させてもらった。これは、お客様に感謝の気持ちをこめて「ありがとう」を言うイベントで、その一環で、パイロットからCA、整備士、駐機場の方まで大勢の人が集まり、今から離陸する飛行機に向かって手を振った。駐機場に出てみた飛行機は予想以上に大きかった。その後は、本社でデスクワークを手伝った後、社内プレゼンテーションを見学した。最終日は1日デスクワークの手伝いで、午後からはパイロットの訓練生たちの貨物についての話を聞いた。そしてそれが終わると、研修終了。

私は、研修の指導を引き受けてくださった皆さん、そしてそれ以外でお世話

になった皆さんに心からお礼を言って本社をでた。本社を出ると急に涙があふれて止まらなくなった。もうお世話になった人たちとはあえないと思うとちょっと悲しくなった。だから私は、絶対に皆さんがお仕事の時間を割いてでも教えてくださったことを無駄にしないで立派なパイロットになって見せると心から思った。

この研修を通して色々なことを学んだが、特に感じたのは社会は甘くないということ。夢はパイロットになることで、それを目標にがんばっていくつもりだが、長い人生、目標を他のものに変えることもあるかもしれない。でも、私はこの貴重な体験を忘れはしない。この体験があって、さらになりたいと思ったし、勉強する時は、お世話になった人々を思い出そうと思う。彼らがかくれた助言や応援の言葉は私にとってとても心強いものです。これからもそれを支えに未来に向かって私がんばりたいと思う。

<留学報告>

アメリカでの貴重な体験

吉田美貴
高等部2年

私は2007年の9月から2008年の6月まで、アメリカのマサチューセッツ州のボストン郊外、Ayerという田舎の町に留学していました。ボストンはアメリカ北東部にあり、アメリカ発祥の地、独立戦争の地で有名です。New Yorkからは、Amtrak Acela Expressで3時間半ほどの所にあります。ボストン市内には、Harvard大学やMIT(マサチューセッツ工科大学)、Boston Red Soxのホーム球場であるFenway Parkもあります。ボストン郊外にはたくさんのBoarding Schoolが点在しており、Ayerもボストン市内からは、車か地下鉄MBTAと近郊列車Purple Lineを2時間以上乗り継がないと行けないほど田舎にあります。2、3ヶ月に一度Boston tripがあり、友達と街を見て回る機会もありました。狭い街で治安もよく地下鉄Tが発達しており、どこにいくのも便利です。気候的には、緯度が北海道より少し上にあるので、冬は氷点下になることも度々あり、雪は腰の高さまで積もります。足の先の感覚がなくなるほど寒い日もあり、誰かが“耳がちぎれるほど寒いらしいよ”といった言葉が思い出されたものです。学校の生徒の7割はBoarding Studentですが、残りの3割はDay Studentとして毎日車で通って来ていました。また、International Studentは全校生徒の1割にも満たないほど少なく、韓国、台湾、中国、ロシア人が多く、日本人はSenior, Juniorに3人いただけでした。学校の敷地内には10の寮があり、私のいた寮はBiglow dormと言う女の子ばかりの寮でした。留学前はBoarding Schoolでの寮生活というものに強い憧れがあり、とてもわくわくしていましたが実際の生活は映画で見ていたのと違って厳しい規則が多くあり不自由な面が多かったように思います。

授業のスピードはとにかく速くて課題も多く、ついていくのが精一杯でした。その日の課題が終わらなくて、ルームメイトに迷惑がかからないようにcommon roomへ行って、課題に取り組んでいたことも

ありました。American Nativeについての授業が終わった後に、日本の同じ様な伝説や言い伝えを調べて次の日にプレゼンをしなさいといわれたときには、“次の日なんて、鬼や!”と思いましたが、やらないわけにもいかないので、あわてて資料を集めて取り組みました。その時あらためて、自国のことを知らなさ過ぎると自覚をしました。日本人なのだから日本のことを知りませんでは通らないし、自国の文化を大切にこそ日本人ですと胸を張っていえるのだと実感しました。その時役に立ったのが、SISで鍛えられたプレゼンの力です。その時ほどSISで即実践で使える授業を教えてもらっていてよかったとSISの先生方に感謝をしました。また古典のシェイクスピアの授業は、私にとって最も辛かった経験かもしれません。古典英語もわかりにくい上に、発音も古典の発音を真似て言わなければならない、これだったら日本の古文の方がまだ数百倍もましだと思います。

生徒の大半の子は学校が終わるとスポーツアクティビティを取っていました。私はフィールドホッケーをやっていました。練習はとてきつくて、放課後3時間みっちり練習がありました。学校の代表として他校試合に行く回数も多くありました。私のポジションはLeft Wingでした。自分の適性のポジションが見つかるまで色々なポジションを練習させられ、大事な試合で得点を決めることが出来たときは最高の気分でしたし、チームメイトと抱き合って喜びました。試合がない週末は基本的に自由です。Dormの大抵の生徒は親が迎えに来て、自分の家に帰ります。そんな訳で週末のdormはいつもInternational Studentだけが残って、がらんとして寂しい状態でした。私のDormは韓国の子が圧倒的に多く、彼女等は週末、寮の食事は取らずキムチなど韓国の食材を持ち込んで、ご飯を炊いてみんなで食べていました。(学校のカフェテリアの食事はアメリカのフードサービス



の会社が提供していて、あまり評判はよくなかった。)食事面でのストレスが溜まっていた私はうらやましくて仕方ありませんでしたが、仲間に入れて欲しいなんて言う勇気もありませんでした。最初の1カ月ぐらいは、日本が恋しくて日本に帰りたと思っていました。そんな私にも親友と呼べる友達Hannahが出来てからは変わりました。彼女のお父さんが私をHannahと一緒に家に連れて帰ってくれ、彼女の家で過ごすことが多くなりました。Long vacationの時には、Hannahの家族がNew Yorkや、American footballの試合Boston Symphony Orchestraなど色々な所に連れて行ってくれました。最初は辛くて仕方なかったアメリカでの生活も、素敵な友達に出会ったことでどれ程救われたか知れません。お互いに助け合い信頼できる良い友達が出来たことで私のアメリカでの生活は、その後の数ヶ月がすばらしいものとなりました。期末テストも無事終わり学校もいよいよ終わりの日、図書館に友達が集まっていて、みんな私を待っていてくれました。うれしいのと寂しい感情が交錯して涙が出てしまいました。今でも、アメリカで出来た友達や先生とは連絡を取り合っています。

海外での生活を振り返って思うことは、あらためて自分を見直すよい機会を得たという事です。良い意味で自分の事を客観的に分析できるようになったと思います。いま思えば、この留学も私の人生から見れば一瞬の出来事何だなどと思いません。人生は一瞬一瞬の連続だからこそ、凄く大切にしなければいけないのだと思えます。今の私は過去の私の連続の上にあるのだから、今まで私に関わって下さった皆さんすべてに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

The 留学

神田凌吾
高等部2年

始めに、留学報告を書くにあたって、今までの留学報告を読み返して見たのですが、人それぞれ書いていることがばらばらなので、僕も自分の書きたいことを書こうと思います。興味のある分野じゃなかった人ごめんさい。

アメリカのニューメキシコ州から帰って来て、もう2ヶ月が過ぎました。留学中の記憶も少しずつ曖昧になってきていることが少し悲しいです。

一方、今でも覚えていることは、たぶん、一生忘れないでしょう。よくしてくれた家族、短い期間ですごく仲良くなった友達、サッカーのチームメイト、目をかけてもらっていた先生、スカンクを追いかけて行った日は（臭くなるので）みんなに嫌われていた犬、途中家族に加わった魚、ヤギ、妙に僕に絡んでくる家族の古くからの友達など、僕が覚えている人はなかなか個性の強い人達ばかりです。では、僕はみんなの記憶に今も残れているのか。と、ふと思います。

僕の留学は、交換留学ということで、何かをお互いに交換し合い生活していました。僕は、向こうでいろんなことを経験してきました。それは言語であり、文化であり、人の感情、日常生活など、慣れ親しんだ環境であればなんとも思わないことも、環境が違っていると自分に重く響きます。そして、帰ってきてから分かることなのですが、内面的なことの変化は予想以上に大きく、自分自身で驚くことや、または他人から驚かれることも少なくはありません。それらは、これからの人生で僕を助けてくれるのだと思います。

それでは、僕が何をあげられたのでしょうか。僕が経験させてあげられたのは、僕の持っているバックグラウンド、文化、言語など、やはり内面的なことばかりでした。でも、今考えると与えてもらったことと、与えたことの釣り合いが取れていない気がします。与えてもらったことの方が、圧倒的に多いのです。終わってしまったことなので悔やみはしませんが、もし次回があるのならば、どちらもイコールで繋げられるようにしたいです。

留学の話をするとうまく聞くのが、ホーム

シックというのですが、やっぱり僕はわかりませんでした。でも、こんな僕でも留学中に思ったのは、何かが起こった後のポジティブとネガティブの比率がおかしくなってしまう、ということです。ネガティブの方が、強く自分の中に残ります。

些細なことで落ち込んだり、そこから立ち直るのにいつもより時間がかかったりします。少しぐらい良いことがあっても、なかなか回復しづらかったりします。でも、そんなことを経験したことで、自分を成長させてくれたと今では思います。

留学中に一番うれしかったことは、本当に毎日一緒にいるような親友ができたことです。僕は、正直言ってかなりのめんどくさがり屋なので、ホストファミリーから来たメールに返信を出すのに1、2週間ぐらいかかるのですが、Eric（その親友）からメールが来たときは、失礼ながら即行で返信しています（秘密ですよ）。

向こうにいた時は、ほぼ毎週 Eric の家に泊まりに行っていました。一度 Eric の両親に、「また（ニューメキシコに）帰ってきたら、おいでね。いつでも大歓迎だから。もし、こっちの大学に行く気になったら、ステイしていいよ。」と、言われてかなり嬉しかったのを今でも覚えています。とても温かく、良い人達でした。最終的に、Eric の家族は僕の中でホストファミリーと同じか、それ以上の存在になっていました。

それと、今まで僕は友達や身近な人で、尊敬するということがほとんどなかったのですが、今思うと僕は Eric を尊敬していたような気がします。

学校の初日、僕はちょっとがんばって、（なめられんとこ、初日からなめられたら後でだるそうや）と思いながら、気合を入れて学校に行きました。少し幼稚な気もしますが…。クラスに入ると、ほとんどの男子はこの見慣れぬアジア人の少年に、かなり積極的に話しかけてくるのですが、僕はあんまりしゃべらずに様子を伺っていました（あまりしゃべるとなめられると思っていたので）。そうしたら、1人だけ同じようにこっちを観察してきている人がいました。これが Eric です。（あいつ親玉っぽいなー）と、その時はかなり幼稚な事を考えて、警戒していたのですが、日が経つにつれてどんどん仲良くなっていき、最終的にはネタを振り合うような仲でした。



Eric は頭がよかったです。それは勉強ができる、とかではなくて（むしろ勉強はダメなぐらい）、実際に生活する上で頭が良かったです。また、Eric はいろいろな技術も持っていました。そして、将来したいことが決まっていて、はっきりと、そこにたどり着くまでの道のりを理解し、実践する行動力を持っていました。そういう芯の強さがあるっていうことは、かっこいいなあ。と、僕は思っていました。

頑固さと柔軟さの大切さも、Eric から教わった気がします。自分が自信を持っている分野では、Eric は絶対に譲らず、それもないが間違っていないで。反論しているのが、Eric 1人の時でも全く気にせず、主張し続けていました。一方、未知の分野に関しての柔軟さにも目を見張るものがありました。関心を持てば、ずんずん奥まで進んで行き、何事も自分のものにしていました。僕は、そのどちらも中途半端にしかできていなかったのも、それが凄く輝いて見えていました。

新しい環境に自分一人で踏み込んで、そこで生活するのは決して楽ではないことだと思います。でも、だからこそ自分が成長するし、その速度、伸び幅、質も計り知れない物になるのではないかと、僕は感じました。僕にとっての留学とは、自分を変えられる場であり、何もかもが新鮮な刺激の宝庫でした。人間の価値観が十人十色のように、留学の価値、目標も人それぞれです。ただ1つ言えることは、その留学の価値、目標を見つけ、ものにすることは全ての人にとって意義がある。と、ということです。

最後に、この場をお借りして、僕の留学に関わってくれた家族、先生方、ホストファミリー、Eric の家族、留学団体のボランティアの方々、僕が知らない所で助けてくださっていた方々に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

異動のお知らせ

＜新任＞

中富 玲
数学科

9月の秋学期から数学を担当しています中富玲です。私は大阪大学の大学院で数学を専攻し卒業するまで数学と向き合う日々を送っていました。

ところで、「数学」と聞くと皆さんはどんなイメージをもたれるでしょうか。「難しい」「文字がたくさん出てきてわかりにくい」などマイナスのイメージをもたれるでしょうか？それとも「解けたら面白い」「考えるのがゲームやパズルのようで楽しい」などプラスのイメージをもたれるでしょうか？

授業の最初に「数学の印象は？」と聞くと様々な答えが返ってきて、考えさせられ、もっともっと楽しくて実のある授業をしていかねばと思いました。みんな、授業に対する姿勢は真剣で教えるこちらもいつも刺激を受けています。これからもみんなといっしょにいい授業を創っていったらと思っています。よろしくお祈りします。



長谷川夏子
スクールナース

はじめまして！弥永先生がお休みの間、保健室を担当します。スクールナースの長谷川夏子です。SIS（当時は、OIAでした）に中学校1年の時に一般生として入学し、6年間、こちらで学んでい

ました。2001年の春に卒業し、看護大学へ進学。病院での臨床実習や国家試験を乗り越え、無事4年で卒業。卒業後は、大阪市内にある病院の手術室で3年程、勤務しておりました。今回、弥永先生がお休みされるということで、秋学期よりSISに7年ぶりに帰ってきました！生徒の時にお世話になった先生やスタッフの方もたくさん居られて、本当に懐かしい気分です。

SIS在学中には、スポーツクラブに入っ てAPAC（今は終わってしまいましたが）に参加し、11年生の学年旅行の旅行委員会で委員長、サマーキャンプのレンジャー、英語演劇部（EDC）を立ち上げたり…と、ここには書ききれない程、さまざまな事に参加していました。仕事を始めてからも、趣味でネイルを学んだり…いろいろな事に挑戦しています。

保健室での仕事は初めてですが、精一杯がんばっていきます。スクールナースとしてはもちろんですが、SISの卒業生としても、皆さんと色々お話ができればと思っています。1年間よろしくお祈りいたします。



ペク・ソンヨン
韓国語

アンニョンハセヨ！こんにちは。9月からみなさんに韓国語を教えるペク・ソンヨンです。みなさんと一緒に勉強ができ、とてもうれしく思います。韓国語を勉強しながら楽しく韓国の文化や韓国人のこと

も一緒に学びます。韓国、韓国語、ドラマ、映画、歌、なんでも韓国に興味のある方は月曜日と木曜日には学校にいますので、ぜひ会いに来てください。カンサハンニダ（有難うございます）



Vernon Villapando

Strings/Orchestra Director

Vernon studied Music at the UST Conservatory of Music, and at the UP College of Music (both in Manila, Philippines) with a degree of Bachelor of Music Majors in Music Education and Trumpet. He was featured as a solo artist in various concerts by the Manila Symphony Orchestra, the Philippine Philharmonic Orchestra, and by the Manila Chamber Orchestra where he was also commissioned as the orchestra's principal trumpet player. He also performed as a solo artist in several stagings of the prestigious Las Pinas Bamboo Organ International Music Festival.

Vernon took his first conducting lessons under Prof. Bernardino Custodio (Manila Symphony Orchestra), and under Prof. Sergio Esmilla, Jr. (Manila Chamber Orchestra). He also attended a chamber music course at the 27th International Summer Chamber Music Workshop at Weikersheim, Germany in 1982. In 1986, he took Orchestra studies at the US International University in San Diego, California where he was also tapped to do principal trumpet chores with the International Orchestra. Vernon took formal lessons in conducting under Prof. Zoltan Roszynai (Budapest Symphony Orchestra) in the same university. In 1990, he further enhanced his conducting skills at the Guildhall School of Music and Drama in London as a British Council Fellow. While in London, Vernon also studied trumpet under noted BBC Symphony principal trumpet Paul Cosh.

As a teacher and professor, Vernon taught Music History, Early Music, Band and Orchestra at St. Scholastica's College Manila, San Beda College, University of Sto. Tomas, International School Manila, Brent International School Manila and at the Senri/Osaka



後列向かって左から Vernon Villapando、John Searle、中富玲、
前列ペク・ソンヨンの各先生方と前列右スクールナースの長谷川夏子さん

International School where he is currently connected.



野間久美子

図書館

はじめまして。9月から図書館スタッフとして働くことになりました、野間久美子です。今年の3月に大学を卒業し、現在は大学院へ通っています。大学では教育学を専攻していて、その時に図書館情報学と出会い、今は学校図書館について研究しています。とても魅力的な千里国際学園の図書館で働けることを嬉しく思っています。ではみなさんと出会うことを、楽しみにしています。どうぞよろしくお願ひします。



master a sequenced series of skills that take considerable effort to acquire. Students at SOIS are talented and have this ability. The opportunity to play at Maple Hall is very special and something which all students should experience.

Thank you to all the people, staff, students and administration who have helped me during my stay here - I will miss you all!

My wish is that you will continue to enjoy making music, in what ever form and that you all keep music in your life.

Try to sing or play an instrument in a group. Be involved in making music throughout your life ? it's so much fun and a great way to relax.

I leave you with a few quotes:

We have to establish already in schoolchildren the belief that music belongs to everyone and is, with a little effort, available to everyone. ? Zoltan Kodaly, Lecture, 1946

When words leave off, music begins. ? Heinrich Heine

Music produces a kind of pleasure which human nature cannot live without. ? Confucius. Book of Rites

And one final quote:

Making music, in fact, is the best way of learning about music. ? Richard Baker

John Secomb,
Music Coordinator,
Orchestra Director

June 27, 2008

Steven Hall

I have very much enjoyed working with the SIS teachers, staff and students this past year. Living in Osaka has been great, and I am now addicted to Okonomiyaki, so I will need to return frequently! I wish the school continued success.



石井智恵子

図書館

日々の業務に忙しく、また、なかなか照れくさくて皆さんにはきちんとご挨拶が出来なかったことをお詫びいたします。

SOIS 図書館で働き出してから1年と少し、みんなの名前と顔も一致するようになって学校の特徴も掴めてきた頃です。憧れの職業司書であり、また二言語対応の図書館で働く喜びは私にとってとても大きなものでした。何より、みなさんが毎日何らかの形で図書館に足を運んでくださったことがとても嬉しかったです。「特に用はないけど、ちえちゃんの顔を見に来たよー！」と言ってきてくれたこと、「おす。」とだけ言ってわざわざ図書館を通り抜けて行ってくれたこと、忙しい中での嬉しいひと時でした。みなさんとの思い出はいつまでも色あせないでしょう。みなさんの輝きはどの本よりも素晴らしいです。その素直な心、思いやりの深さ、そしてとびきりの笑顔をいつまでも忘れず持っていてください。さようならは言いません。素敵に成長した皆さんとまた再会できる日を信じて、楽しみにしています。短い間でしたが、お世話になりました。どうかお元気で！

< 退任 >

Farewell for SIS

John Secomb

Strings/Orchestra Director

I have been teaching at this wonderful school for the past six years. It has been some of the most rewarding teaching I have ever experienced in my life.

The students at SOIS are very dedicated and musical. They work very hard in all areas of the curriculum, clubs; sports etc. and see music as a way of enjoying some respite and fun. To teach in the shared program, as I have done across the two schools, perhaps, gives a better insight in to how this unique school works.

I know I am a hard task master at times; I set high standards and expect them to be met! I don't apologies for that ? making music come alive is some thing which is important, as it touches our inner selves, touches our emotions and the emotions of the listener. Music replaces silence, and some times goes unnoticed!

I have worked with many groups in the MS/HS Music Program. To play music well, you need to learn and

秋学期入学帰国生数

入学センター

《最終在留国》

アメリカ	13名
イギリス	1名
オーストリア	1名
タイ	1名
フィリピン	2名
オーストラリア	1名
ベルギー	2名
国内外人学校	2名
計 8ヶ国	23名

《学年》

7年	7名
8年	3名
9年	3名
10年	2名
11年	6名
12年	2名
計	23名

学年だより

● 中等部1年生 (7年生)

いつか来る親離れ、子離れ

木村典子

3組担任、国語科

7年生には秋学期より7名の新入生が入ってきました。1組の森川巧基君・新美暁生君、2組の五井達也君・堀海渡君・山野綾花さん、3組の五井春香さん・武中圭樹君です。7人とも初日より授業があるという、本校特有のシステムに戸惑うことも多かったと思いますが、何とか頑張っています。これからも大変だと思いますが、あまり気張らずに、友達の助けを借りてゆっくり馴染んでください。私達担任団も喜んでお手伝いをしますので、困ったときはいつでも相談してください。これで7年生は全部で63名になりました。

長い夏休みでしたが、無事に何事もなく済みました。これも保護者の方たちのご協力によるもので、心より感謝申し上げます。久方ぶりに登校して元気な顔を見せてくれました。年々感じるのですが、以前の7年生は夏休みが開けるといっぺんに成長するというか、変化がありました。最近の7年生は夏休みが開けても春学期と全然変わりません。幼いのです。担任としては変化が無いのは有り難いことなのですが、やはりいつまでも幼いのは困ります。どこかで成長して親離れをして欲しいです。それも上手にして欲しいと願っています。子供は親離れをしようしようともがきます。それを親が邪魔をしてはいけません。どうぞ親御さんも上手に子離れをしてください。

私の子供 (今30才前半から半ば) の時代より、今の子供達ははるかに親のことを思っている気がします。生徒と話をしてもいつも親の事を気にしています。そして良い子でようとしています。そういう意味では本当に親孝行です。その分親のことが負担になることも多いのではないのでしょうか。もう少し人間関係が淡白である訓練が必要だと思います。子供を私物化するのではなく、一人の人間として尊重し、成長をゆったりとした目で見えてやることこそが、親としての大事な姿勢だと思っています。偉そうなことを言っていますが、このことを自分の子育ての時に気が付いていれば良かったのにと反省しています。

昔より永遠のテーマである親離れと子離

れ。上手に出来て、学校生活を満喫し、自分の将来に向かって生き活きと成長する生徒となることを祈っています。それために担任が力になれるとうれしいですね。

● 中等部2年生 (8年生)

携帯サイト

馬場博史

3組担任、数学科

8年生の秋学期は、各組にひとりづつの編入生を迎えてスタートしました。早速、クラス代表と図書委員を決め、さらに秋学期ならではのスポーツデイの係 (パフォーマンス・応援・競技) を決めて、その準備に忙しい毎日を過ごしています。

さて、私が中学2年ときの夏休みは野球の部活動だけですべて終わったといってもいいくらいでした。我が SIS 8年生はどんな夏休みを過ごしたのでしょうか。秋学期最初の LHR で、夏休みの報告を各自に書いてもらいました。3組では、サマースクール・研修・旅行などで海外へ行ったという人がほぼ半数いました。中には2ヶ月の間ずっと海外にいた人もいました。また国内でも、親戚の家・旅行・スポーツなどの目的で遠出した人も多数いました。宿題は全体的に多かったという意見が多く、みんなかなりの時間を費やしたようです。そのためか、それ以外の自主的な学習・研究をした人はあまりいなかったようです。

ところで、私が夏休み中に読んだ本の中で最も印象に残ったのが「学校裏サイト」(東洋経済新報社) です。子どものインターネット・携帯電話利用問題に取り組んでいる大学教授によって書かれたものです。「学校裏サイト」とは、「子どもが自ら開設し、実在の学校の名前を付けたウェブサイト」のことで、その実態と解決策が述べられています。その中でも携帯サイトの現状が詳しく紹介されていました。「SNS」とか「モバゲー」とか「プロフ」などの新しい用語も知りました (ご存知でしたか?)。内容を要約すると、携帯サイトはパソコンで利用するインターネットと同様に、便利な面も多いが有害な面も多いので、現状をよく知った上で必要に応じて対策をすべきだということでした。

この本は今年3月に発行されたのですが、その影響を受けたのかどうか、たまたま私がこの本を読んだ直後に次のような新聞記事を見つけました。子どもの携帯電話の利用法についてルールを決めていないご家

庭では検討してみる必要がありそうです。

「深夜に携帯ダメ」文科省、家庭ルールの指針作成へ (産経新聞 2008.8.20.)

携帯電話を使った子供の有害情報への接触が問題化するなか、文部科学省は、携帯電話の利用方法について親子間でのルールづくりの指針を今年度中に作成する方針を決めた。「食事中や懇談中、深夜には使わない」などの約束事を例示することで、家庭で使用方法を考える契機にしてもらいたいとしている。

中2とその保護者を対象とした日本PTA全国協議会の平成19年度調査によると、中2で43%が携帯電話を所有。携帯電話を持つ中2の51%が深夜までメールをしていた。中2の保護者の65%が携帯使用にルールを設定していると回答する一方、ルールがあると認識している中2生は47%にとどまっていた。

連絡や安全対策として子供に携帯を持たせる一方、利用実態を把握していない親が多いとみられ、文科省では「門限と同様、携帯の利用法も家庭でルールを決めてほしい」としている。

● 中等部3年生 (9年生)

「面倒くさい」事にチャレンジを

中村亮介

3組担任、社会科

中学3年生と言うと、ちょうど僕にとって35年前になります。1973年(昭和48年)です。35年前の世相を振り返ってみると、ちょうど10月6日に中東でアラブ・シリア軍とイスラエル軍が戦闘を開始し、第4次中東戦争がはじまりました。日本では石油が来なくなるとパニックになり、大昨夏のスーパーを皮切りに全国で主婦がトイレトペーパーを買いだめしたり、石油の買占めに世の中が振り回されました。金大中氏(元韓国大統領)が東京のホテルから拉致された「金大中事件」もこの年の8月に起こりました。ドリフターズの「8時だよ全員集合」が50%の視聴率を誇ったのもこの頃です。パブロ・ピカソ、ブルース・リー、が亡くなったのもこの年です。オセロゲームや筆ペン、ゴキブリホイホイが登場したのもこの年です世の中が、何か変な方向に動いていき始めた頃のようなものでした。自分の中でも何かが変化してきて、色々考える時期に来ていました。友達のこと、学校のこと、家族のことなど……。漠然としたモヤモヤした気持ちを抱え始めてもいました。中3と言えば(僕は地元の

公立の中学に通っていたので) そろそろ「受験」という事も頭の中にある形でも入ってくる時期でもありました。学年やクラスの仲間達が必死に受験勉強していたのも思い出されます。受験と言うのは教師になった今でも好きではありませんし、面倒くさい事だと思っていますが、一つの節目を迎える上では大切な通過行事であったように思えます。

SISの生徒の皆さんは中高一貫校なので、多くの人たちが高校受験を意識しなくてすんでいます。それはそれで、ほかの事に受験のための勢力、労力、時間を費やせばいいと思います。せっかく、このような環境の中にあるのですから、もっと、もっと自分からいろいろな事に果敢にチャレンジして行って欲しいと思います。勉強についても、クラブ活動についても、生徒会やボランティア活動も、趣味の場面でもいろいろな場面で今の自分の出来る限りの力を出して行って欲しいと願っています。

僕は基本的に面倒くさがり屋です。人間誰しも面倒な事は出来ればやりたくない！やるにしても後回しにしたい！と思いますよね。最近、それが自分の中で少し変化してきました。面倒だと思うことを「とりあえずやってみる」、そうした気持ちに切り替えて、その物事に取り組んでみたら、結構、それはそれで自分にとって良い経験になったり、楽しかった事がこのところ何回かありました。

一番の例が、昨年の世界陸上のボランティアでした。このことについては以前のインターカルチャで紹介したのでここでは控えますが、ボランティアの登録とユニフォームの受け取りに、昨年の8月の半ば(日本の最高気温が70数年ぶりに更新された日でしたが)炎天下の中、長居の陸所競技場まで行かなければなりません。溶けそうに暑い中行くのは本当に面倒だと思いました。どうせボランティアだし、自分ひとりキャンセルしたって大会には何の影響もないし、と思ってその朝、しばらく布団の中でじっとしていました。しかし、時間が経つにつれて、なぜか「まあ、とりあえず行っておこうか」と言う気持ちになりました。地下鉄の長居駅から競技場までは本当に暑い道りでした。でも、登録を済ませ、ユニフォームをもらって、気持ちが変わってきました。そして、1週間あまりのボランティアで様々な人と出会い、普通だったら出来ないような経験をしました。今でも、その

時のボランティア仲間の人たちと定期的会って食事などしています。

皆さんも是非「面倒くさい」事、にチャレンジしてみてください。そこからきっと、何かが見えてくるかもしれませんよ。

●高等部1年生 (10年生)

終わりがあから

牧百合子

2組担任、国語科

今学期から10年生に2名の仲間が加わりました。10年2組に明石光太郎くん、3組に武中沙樹さん。合計87名の10年生。夏休みの間にいろいろな経験をして、心身ともに成長したかな?と気になったので、HRや初めの授業で「夏休み何をしましたか? どう過ごしましたか?」と問いかけました。そのうちの何人かは、どこにも行かなかった、何もしなかった、とのこと。

今年の夏休みはどこにも行かなかった、という人。そのような人も、今年は家で、テレビの前で、エキサイティングな夏を過ごすことができたのではないのでしょうか? そう、今年北京オリンピックがありました。時差が少ないということで、多くの試合を生中継で見ることができましたよね。水泳、ソフトボール、柔道、フェンシング、卓球、野球、さまざまな競技を見て楽しむことができました。おー! いけー! がんばれー! などとテレビの前で叫んでいた私ですが、ふと、ある疑問が頭に浮かびました。それは陸上5000メートル、10000メートル、マラソンなどを見ていたときのことです。なんで? 一体なぜ、この人たちはこんなにしんどいのに、走りたいのだろうか? 私はたった2キロでもともしんどいのに、なんでこんなに走ることができるのだろうか? みなさんは私と同じような疑問を持ったこと、ありませんか?

オリンピックから遡ること約2週間、今年の7月。世界各国で人気を博した小説が幕を閉じました。「ハリーポッター」、世界で4億部を超える販売部数となったこの作品は、ご存知の通り日本でも一大ブームを巻き起こしました。ポッターと呼ばれるハリーポッターをこよなく愛する人を称する言葉までできたほどです。1997年(日本語版は1999年)第一巻発行後、約10年かかって最終巻発行に至ったこの作品の作者J・K・ローリング氏に関して、以前新聞にこのような記事が載っていました。「第一巻よりも先に第七巻の最終章を書き上げていた。終わりがあから書き進めることができ

た。」というようなものです。終わりがあから頑張れる。終わりのために頑張れる。どうやら作者は、終わりがあからこそ、長い何月がかかっても、作品を完成させることができたようです。

苦しい表情をしながら走っていたオリンピック選手、彼らの心も「終わりがあから頑張れる」だったのではないのでしょうか。ゴールした時の喜び、もしくはレースを終えた時の満足感。そのために、そう、目標があるから走りぬくことができたのでしょう。

新学期が始まり、繰り返しの毎日になりますが、是非みなさん、目標を持って過ごしてください。試合、コンサート、スポーツデイ、勉強など、目標はなんでもいいのです。大切なのは、そのために頑張ること。諦めないこと。SISの生徒ひとりひとりが、自分で決めた目標に笑顔でゴールしてくれることを心から願っています。

●高等部2年生 (11年生)

キーワードを与えてくれた人

池田大介

3組担任、社会科

「夏休みが終わりました。いや、終わったはずです。いやいや、終わったはずだと思っているのに、まだ世間(の学校)では、夏休みかも…」

(以前より思っていたが!?) 池田がどうキレてしまったか!? 「ではなく」、これは、先日顔を見せてくれたSIS(現在大学生やら大学院生やら専門学校生やら会社員やら)の言葉。偶然ですが、複数年度の卒業生が一同に会しました。そして、思い出話に花が咲き…

面白かったのは、彼らが、例えば、池田がここぞとばかりに練りに練って前の晩にツクった教室内の「スピーチ」よりも、朝のHR業内で何となく/何気なく口にした“ちょっとした”一言の方を、よく憶えていて。それこそ、反対に、それを口にした本人: 池田の方が“そんな一言”覚えてなくて…彼等から轟々とクレームが…「影響を受けさせたくせして、影響を与えた人間が忘れていたとは何たることか!」と(笑)。反省はんせい。

その中で、出てきたのが、インターカルチャの池田が書いた記事の一行が、という話になり…

懐かしくなって、この学校に赴任以来、自宅書斎の本棚に整理している「過去インターカルチャ」を放り出し、チマチマとペー

ジを繰ってみました。

そうしたら…ありました！

ということで、今回、その文章を、その当時は進路情報室のメンバーとして書いた部分を11年担任としての視点で改訂し、以下に“版を重ね”当該インターカルチャを以て、本年度、特に、(学年旅行・スポーツデイに向けて頑張っている)11年の皆さんへ(各委員さん達、ご苦労様あ〜っ！)！

今から何十年前の私は、法学部・法律学科を自分の大学進路に選んだ。

よく生徒からも「なぜ」その道を選んだのか、と聞かれるのだが、(よそ行きの説明では、いつもこう言っている…

高校2年生の時に、「政経」担当の先生から、「軽犯罪法」なる進路選択のキーワードを伝授され、そこに小さき頃からの疑問(?)であった“立ち小便したら警察に捕まるで…!”という巷のオハナシが、実際に存在しているや否やという、多分に出歯亀(この‘デバガメ’という言葉も、池田亀太郎という出っ歯の変態男がその言葉の由来?だったかなあ〜…)的的好奇心から図書館を訪ね、生まれて初めて「六法全書」を開いたのである。

私のアルマイト製(?)巨大弁当箱(フタにお茶を入れて弁当をツカったなあ〜懐かしい!)より大きく、そしてブ厚いことに、まず素直に驚き、そして、“立ち小便…”に関する部分を見つけた・いや発見・いや発掘、した時の喜びようと云ったら…その時私は、その「六法全書」自身もつ、他人をよせつけない崇高なまでのカタサと同化し、自分までもが、そこまで昇華されたような錯覚に陥ったのである(思い出とは、多分に脚色された第三者への自賛物語である!)

そう言えば、図書館にも本当によく通った…とにかく静かで勉強がはかどるし、無料で本を読ませてくれるし(当たり前か!)。けれど、図書館通いの本当の理由は…私の自宅にはテレビがなかったからだ。父親は、前(々?)世紀の遺物とも言うべき、恐ろしいまでの聖物(?)で、ある時右手を挙げ家族全員にこう言ったそうである。

「一億人総ハクチ化」だ!テレビはこの家に必要なし!」

この英断(?)のおかげで、中学時代の私は、友人(特に女子生徒と…)

ほとんど話が合わず、どれほどツラかったか…しかし、父は、ほとんど毎日(あれだけよく続いたなあ〜、と思う…父はスゴかった!?)のように、姉・兄・私・妹(5番目の妹はまだ小さかった)の4人に対して「本」を手渡し、人類のほとんどがどれほど多くの素晴らしい本に出会わずして死んでいくかを、何万回となく握りこぶしで演説したのであった。

実際父も大変な読書家・研究者で、とうとう所蔵の本が実家に収めきれなくなって、蔵書用に一軒家を建ててしまったくらいだ。その一戸建ては田んぼのド真ん中であって、書籍保管用に太陽光線を遮断するため窓が一つもなく、不気味と近所で大評判で、「箱根細工の家(火曜サスペンス劇場風)」とも呼ばれているらしい…。

中学時代は真剣に父を恨んだものだが、高校に入学すると、だれもが良い意味での「隣は何をする人ぞ」になり、それぞれがそれぞれ、てんでバラバラのことを一つの教室で行っており、(これ見よがしな!)“なかよしこよし”はなくなった。ガリ勉(なつかしい響き!)するもの、しゃべり散らしている者、ヒンズースクワットをして汗を飛び散らしている者、早弁している者…お互いがお互いを妙に尊びあい、そして干渉しない…もちろん妙な詮索もなし…古い公立高校によく見られる(?)光景が展開され、ようやく私は自分の居場所を見つけた心地であった。

公立高校の、雑食的(?)、これでもか!的カリキュラムには、時には閉口したが、はげしいクラブの練習が始まる放課後までは、休み時間、カットの時間(本校でのアンスケ時間)には、教室の自分の机(1年間決まっていた。SISでは考えられないでしょう!?)で、はたまたクラブの部室で(汚いけどなぜか居心地がいいのだ!)、ジャンルを問わず“文庫本”をむさぼり読んだ。遠い遠〜い昔の話であるが、教師となって今、本校へ来、文芸部の諸君に出会って文学談義に花咲かす三文学少女を見・目を細め「うんうん、おまえもか、おまえもか…」と、肩をポンポンと思わずしたくなったのは、そういう訳で。

あ〜長々と書き綴ってしまったが…

私の学生時代には、その先生を、尊敬して、崇拝して、盲信して、その先生の考えに傾倒した、ということはあまりな

かったような気がするが…

「へ〜」というキーワードを与えてくれた先生はいた(うん、いたいた!)

私の学生時代には、その作者を尊敬して、崇拝して、盲信して、その作品に傾倒した、ということはあまりなかったような気もするが(作者をこき下ろし、いっばしの批評家ぶっていたことはあったが…恥ずかしい!)

「へ〜」というキーワードを与えてくれた本や作者はいた(うんうん)!

…最近本を読んでいないなあ〜“竹林”にこもるのはまだ早いかなあ…

●高等部3年生(12年生)

さあ、運動会2連覇だ!

相良宗孝

4組担任、保健体育科

2組に井上裕美子さん、3組に平松恵美さんが今学期から帰国生として入学し、また、1組の逢坂由貴さん、3組のサンボールドジ オユンビグさんが留学先から戻り、12年生の秋学期がスタートしました。

この高校生活最後の夏休みには、しっかり自分で計画を立てて、志望理由書を書く、苦手科目を克服するなどそれぞれが取り組んでくれたかと思います。この秋学期には、たくさんの人たちがそれぞれの方式での入試がスタートしています。それに伴って受験で失敗することばかり考えてみたり、友達同士のうわさに翻弄されたりと精神的にも、肉体的にもとても疲れる学期になります。しかし、自分を信じて、時間を有効に使い、その困難から逃げずにがんばってもらいたいと思います。

さて、もうひとつががんばってもらいたいの、10月13日の運動会です。昨年は見事12年生を破る快挙を成し遂げ、今回は2連覇がかかっています。個人個人で忙しい時期ではありますが、ここはなんとか皆が協力し、学年が一致団結して2連覇を成し遂げて欲しいと思います。9月のジョイントアセンブリーで学年カラーがオレンジに決まった直後にはTシャツのデザインを募集したり、サインナップを開始するなど学年スポーツ委員が率先し、すばらしいスタートを切ることが出来ました。このままフェードアウトすることなく、最後の運動会を皆で盛り上げましょう。

図書館より

青山比呂乃

図書館

* 図書館によるこそ

編入生、その保護者の皆さん、千里国際学園図書館によるこそ！図書館は、皆さんが入学した SIS と、もうひとつの学校 OIS のすべての人が使う場所。生徒も先生も、それも幼稚園から高校生、送り迎えの保護者と一緒の赤ちゃんまでいろいろな人が行き来し、物語の世界や様々な情報に出会う場です。

図書館は学校の授業日はいつも、朝の8時から夕方4時半までずっと開館していますので、保護者の方も機会がありましたらいつでも訪問してください。保護者の方も登録すれば、本を借りる事もできます。利用規則は生徒と同じで、生徒の利用に支障が出ない範囲に限られます。詳しくは気軽に図書館までお問い合わせください。

なお、4時半から6時までは、中高生の勉強のために毎日開館しています。4時半の下校時刻以降に図書館に残る手続きは、図書館入口横においているサインナップシートに必要な事項を記入することだけです。ただし、7,8年生は、帰りのHR までに担任の先生のサインを別の許可書スリップにもらって図書館入口で自分のサインと同時に提出することになっています。皆さんの放課後の安全管理のためにも、夕方の開館のニーズを把握するためにも、きちんと記入するようにしてくださいね。

* 図書館スタッフ近況

昨年度末と6月に、スタッフが退職したのに伴い、4月から岸田尚子さん、この9月からは野間久美子さんが新任のスタッフとして加わりました。二人とも、フルタイムで働いています。

以前からの2名のパートタイムスタッフ(ダッタさん、川端さん)やITスタッフ(宮本さん、大沢さん)と共に、皆さんがうまく図書館を使えるように、図書、雑誌、さらにはオンラインデータベースなど様々な資料の収集・整理の仕事を進めています。

探している本や情報がうまく見つからないときは、司書教諭のクームズ先生(英語)や私青山へは、もちろんですが、スタッフにも気軽に声をかけてください。すぐには解決できないこともあります。いつもできるかぎりの助けを提供したいと思っています。皆さんの必要を知ってよりよい図書館にしていきたいので、よろしくお願いします。

* IFLA (国際図書館連盟) 大会での発表

この夏、8月10-14日にカナダのケベックで行われた、国際図書館連盟(The International Federation of Library Associations and institutions)の第74回年次大会2008に参加して、千里国際学園図書館やSISの総合科目「知の探検隊」のことを発表してきました。今年度の大会テーマが、Libraries without borders: Navigating towards global understanding (“国境”なき図書館: “地球全体”理解に向かって) というものだったため、「明日の地球コミュニティに貢



IFLA (国際図書館連盟) 大会で発表

献する個人」を育成しようというスクールミッションを掲げている千里国際学園図書館の事例はぴったりではないかと日本国内で白羽の矢が立ったわけです。

この大会は、全世界の国々のあらゆる種類の図書館、つまり公共図書館、大学図書館、専門図書館から国会図書館までのライブラリアンや関係者が集まるもので、今回は、3000名以上の参加者があったようです。学校図書館部会はその中では小さいグループですが、数十名の聴衆を前に”J-E bilingual school library in Japan” というタイトルで発表することが出来ました。

同じセッションでの発表は、最初がロシア学校図書館協議会関係の方、2番目が私の日本の事例、3番目はノルウェー、オスロの小学校の事例、最後がカナダのアルバータ州の全小学校における inquiry process による理解教育についての大学教授の発表で、このオバーク教授とは発表後、「知の探検隊」での私たちの気づきとアルバータ州での実践との共通する部分についてなど有意義な話をする事も出来て、ドイツの学校の人からの質問も出ました。こうした試みが日本でされていることは、確実に伝わったことでしょう。

また、大会前後には、その活動の充実度で30年以上前から児童サービスやオズボーン・コレクションという子供の本の貴重書などで有名なトロント公共図書館を中心に、トロント大学図書館や日本国際交流基金図書室などを、他の日本からの参加者の皆さんと共に3日間にわたって視察しました。トロントは今でも多くの移民を受け入れている町で、地域住民の必要に応じて、中国語をはじめ、マレー語ほか10ヶ国語の図書などをそろえていること、移住してきたばかりで英語の出来ない大人や夏休み中の子供たちのための英語教室などのサービスなど多文化サービスの充実ぶり、子供たちや10代の人たちへのサービスのあり方など、いろいろと刺激を受けてきましたので、この経験を生かして、図書館をより使いやすくしていきたいと思えます。



英検1級に1名合格

水口 香
英語科

英語資格試験の報告

今回は、2008年9月9日までに報告があった各種英語検定試験の合格者をご紹介します。

【英検】

英検1級

亀井潤君(12年)が、みごと英検1級に合格しました。おめでとうございます。すでに高度なフランス語を習得している亀井君ですが、英語でも大きな成果をあげました。ますますの飛躍を楽しみにしております。他の級は以下のとおりです。

英検準1級 9名

英検2級 9名

【国連英検】

A級 1名

C級 1名

合格者の皆さんおめでとうございました。今後の健闘をお祈りしております。



亀井潤君

Bilingual Speech Contest

Peter Heimer

English

- Languages: Japanese, English
- Theme: poverty
- Length: 5 minutes for each language
- Deadline: 25 October 2008
- Application: Please see Mr. Heimer.
- Website: <http://kobecrp.at.infoseek.co.jp/fcrossramepage6.htm>

中国語検定試験報告

中島かり

中国語

4月から通常授業と平行して本格的に中国語検定試験に取り組み、日々の課題をこなしながら、6月22日の試験に挑みました。以下の方が見事な成績を修められました。

谷南津子 八尾彩加 三級合格

鈴木 景 池田愛美 山澤友香 四級合格

また6月14日の中国語コミュニケーション能力試験C.TESTで山口留以さんが全受験者中16位でした。おめでとうございます！

全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト2位入賞

桂木 忍
ドイツ語

2008年度獨協大学主催 全国高校生ドイツ語スピーチコンテストの報告

7月末に獨協大学(埼玉県草加市)で第10回「全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト」が行われ、SISから2組3名がみごと予選を通過し、本選に出場しました。

対話部門 印藤瑞希・石原英美ペア(11年生)

フリースピーチ部門 逢坂由貴(12年生)

夏休みも学校でがんばって練習したかいあって、満足できるパフォーマンスができました。逢坂由貴さんはフリースピーチ部門で第2位を獲得しました。

なお、このスピーチコンテストの様子は、8月28日(再放送9月1日)と9月4日(再放送9月8日)の2回に分けてNHK教育テレビ『TVでドイツ語』で放映されました。

ドイツ語オリンピック A2部門3位に SIS 卒業生

7月末から8月はじめにかけて、ドイツ東部の町ドレスデンでドイツ語を学ぶ20歳までの世界中の若者を対象にした「ドイツ語オリンピック」が開催され、SIS卒業生で現早稲田大学2年生の手木マリアさんが、レベルA2部門個人の部で3位を獲得しました。この賞の獲得によって、手木マリアさんは来年ベルリンでのドイツ語の語学講座に招待されます。

3位を獲得した個人課題で、手木マリアさんは日本のお菓子(お茶菓子)とドイツのケーキを文化的に比較した美しい散文をドイツ語で書き上げ、手作りの絵やデザインで工夫を凝らした壁新聞に仕立てて発表しました。

手木マリアさんは、このオリンピックでさまざまな国からやってきた若者とドイツ語で交流し、「本当に楽しかった！」と滞在をエンジョイしながらも、自分のドイツ語は日本にいるとレベルが高いと思っていたのに、世界にはもっと流暢に正確にドイツ語をあやつるすごい若者たちがいるのだ、感じたということです。自分のドイツ語を磨くモチベーションがだんぜん高まったと話していました。

SISでドイツ語に限らず第二外国語を勉強しているみなさんも、このように教室で勉強している環境を飛び出してどんどん外に出てみてくださいね。自分の実力を試せるだけでなく、同じ言語でつながる友達が見つかりますよ。

ドイツ語検定合格者の報告

2007年6月に全国で行われたドイツ語検定にSISから次の2名が合格しましたので、紙面をかりてご報告します。

4級合格 姜未和(12年生)、板橋直人(10年生)

日頃の勉強の成果ですね、おめでとう！

なお、秋のドイツ語検定の願書も学校に来ています。受験希望者はぜひ桂木に声をかけてください。また、図書館には過去問題集もあります。

パソコン甲子園に出場

合志智子
情報科

9月6日（土）に行われた全国高等学校パソコンコンクールの「プログラミング部門（予選）」に、SISから2チームが参加しました。昨年度に続き2度目のチャレンジだった高等部3年石神宥真君と西本航君、今年初チャレンジの岩崎一樹君と半田将一君です。使用するプログラム言語はC/C++、Javaのいずれかで、今回の2チームはJavaを使いました。

◆全国高等学校パソコンコンクールとは

全国の高校生及び高等専門学校生などが、情報処理技術における優れたアイデアと表現力、プログラミング能力等を競い合うもので、福島県、会津大学の主催で毎年実施されています。

◆本校から参加した「プログラミング部門」とは

同じ学校の生徒2名1チームで、制限時間3時間内に難易度の異なる問題の解答プログラムを作成し、その合計得点を競います。予選と本選があり、予選は各学校において一斉に実施し、インターネットを使ってプログラムを提出します。本選は全てのチームが会津の本選会場に一堂に会し競技を行います。

◆予選の結果

今年は全国から358チームが予選に参加し、9月17日にその中から20の本選参加チームが発表されました。残念ながら本校の2チームは本選へ進みませんでしたが、集中力が途切れることなく3時間よく頑張りました。

◆来年の参加チームを募集

SISの情報科のIT4という授業では「プログラミング」を学習します。使用する言語はVisual BasicというC/C++、Javaより初心者向けの言語です。今回参加の4名もこのIT4の受講者で、IT4の学習範囲を飛び越えてプログラミングを楽しんでい

ました。今年参加の2チームは12年生ですので、今年の甲子園が最後となりました。ぜひ、来年はまた新しいチームが参加してくれることを期待しています。これまでの出題内容を見てみたい方は、情報科へ来て下さい。

◆参加生徒の感想文

二回目のパソコン甲子園、今年もダメだった。しかし悔いはほとんどない。本戦には出られなかったが全力でもってしてあげたのだから気持ちがいい。プログラミングはスポーツである。しかも努力すればそのぶんだけうまくなれる。そんなスポーツだ。機会があればより上の大会に出てみたい。（西本航）

私がパソコン甲子園に参加することになったのは、夏休みに友達に参加を勧められたからです。誘われたのが夏休みのはじめだったので、開催される9月まで勉強することができました。パソコン甲子園は3時間と長い大会でとても疲れましたが、自分でプログラムを組む楽しさを実感することができました。自分の可能性を知ることができるすばらしい大会だと思いました。（半田将一）

今回初めてパソコン甲子園に参加して、他校のプログラミング技術と我々の実力の違いを実感した。10門出題されたのを3時間以内に解答するのは、全く時間が足りないのです。現在、早く正確にプログラミングするためにC++を勉強しています。これからも、プログラミングを究めていこうと思います。（岩崎一樹）

とにかく配点が高い問題は難しい、の一言です。6点の問題はものの数十分でプログラムを完成してしまえるようなものですが、僕が解こうとした20点の問題は、3時間かけても解けるものではありませんでした。どの問題でも、頭をフル回転で使うので、良い頭脳のトレーニングになります。もしプログラミングに興味があれば、是非とも挑戦してもらいたいものです。（石神宥真）

大学数学公開講座に参加

馬場博史
数学科

大阪大学数学公開講座報告

8月21日（木）22日（金）に大阪大学で高校生対象の数学公開講座「現代数学への冒険」が開催されました。講義内容は「オイラーの等式」「複素数とn次方程式」「複素数で幾何学」「数え方のいろいろ」でした。このうち「複素数で幾何学」に参加した生徒の感想を紹介します。

三上夏実

高等部2年

内容はすごく難しくとても高校生向きとは言えませんでした。高校で習った数学を更に応用して色々な場面に発展させていくものでした。なので、求め方は分からなくても、数学が様々な方面に展開されていくのがおもしろかったです。

市大授業案内

大阪市立大学理学研究科理学部主催「高校生のための市大授業」が、11月30日（日）13:00より開催されます。数学の内容は「無限と極限」です。受講料は無料。他に理科もあり、その内容は「シミュレーションでみる波と粒子の物理学」「植物の一生と光環境」「人間と自然の相互作用一例としての水資源の危機」「ビッグバン宇宙への招待」「分子の三次元構造を見る」。詳細は大阪市立大学のウェブサイトをご覧ください。

実用数学検定（数検）2級に1名合格

7月6日に行われた数検個人受検で2級に1名が合格しました。10月4日（土）には本校で2回目の数検団体受検が行われます。今回は13名が受検予定です。こちらの結果も楽しみにしています。

生活科学科

ふれあい交流学習（保育実習）を終えて

ふれあい交流学習で学んだ事

細川 健

高等部3年

保育園には色々な性格の子どもがいました。子どもたちとふれ合うことで、僕が小さい頃がどんな子だったのか、考えさせられました。それに、子どもたちと同じ空間にいて、すごく和やかになっている自分もそこにいることを感じさせられました。些細なことで笑う子どもたちといると、逆にこっちまで楽しい気分になっている感じがしました。

僕は、1歳児のクラスを担当し、ままごと、砂遊び、絵本を読み、おんぶや抱っこなどをして、子どもたちと遊びました。室外では、砂場で、特に自分の担当のクラスではない子ども共、ままごとをしました。室内では、おもちゃの携帯電話や、車のおもちゃなどで一部の子どもではなく、いろいろな子どもと遊びました。子どもたちと遊んでいてわかった事は、一歳の段階では、まだ集団で遊ぶということは比較的あまりせず、むしろ一人で自分のやりたいことを自由にやる傾向があるという事でした。

また、一度興味を持ったものは、それについてとことん興味を示していたように見えました。例えば、僕は子どもたちに分かるようにと、オレンジ色のネコの名札をしていたのですが、教室に入ってすぐに僕に興味を持ったのか、僕の方に来て、名札に没頭する子どもたちがいました。それを小さな手でつまんで引っ張っていた子もいれば、「な～に？」と聞く子もいました。初めは、違うところでまったく違うことをしていた子どもたちも、僕の方に来ては同じような行動をとっていました。そこで僕が思った事は、一歳にもなると、一人で遊んではいるけれども、周りの状況を察知し、同様の事をしようとするのだということでした。それに、子どもたちは、すぐに抱きついてくるので、おんぶをしたり、体を動かしたりする遊びに喜んでいました。興味を持ったことには没頭するけれども、飽きっぽいところもあるのだということも、分かりました。一歳児は、色々なことに興味や関心を示し始めている時期なのだなどと改めて感じました。

それに対して、保育園の先生は、どの

ような状況にも的確かつ瞬時に反応していて、すごいと思いました。また、甘やかしすぎず、間違っただけには間違っているときちんと指摘していたし、子どもたちのちょっとした素振りなどで、その子が何を訴えているのかを、すぐに見極めていました。ひとりの男の子が滑り台のほうへ走って行った時に、その子が転んで泣き始めてしまったのですが、僕が、すぐにその子のもとに近寄ったら、彼はすぐに泣き止んだ事がありました。すると、先生は後から来て、「うそ泣きで、かまっただけかと思ったら泣き止んだ事があるよ。」と笑いながら言っていました。先生たちは、遠目からでも、うそ泣きとそうでないものとの区別が出来るほど、それぞれの子どもたちの行動をよく観察し、気持ちの変化まで熟知していて、すごいと思いました。

その先生たちから、「一歳児は、まだお皿の周りについて食べ残しをスプーンで取ることができないので、それをスプーンで取って食べさせて」と言われました。その時に気づいたのですが、自分で食べている子どもと、先生たちに食べさせてもらっている子どもがいました。こういう些細なことに関しても、やはり一人一人出来るようになるまでの時間が異なっていると感じました。

ふれあい交流学習をふり返ってみると、子どもたちとの触れ合い方を学んだことが、何より大きかったです。子どもたちと触れ合うことで、「ことばの通じない相手には、どのように接するべきなのか」を考えさせられました。このことは乳幼児のみに限らず、僕たちの学校ではよくあることです。一番簡単な例が外国人との会話です。まったく異なった言語を話している人同士が、お互いに会話するにはどうするべきなのか。乳幼児との会話の面において、外国人と会話をする場合とでは、そんなに変わりはないと思いました。自分の言っていることが相手に伝わらなくても、それを強要するのではなく、まず相手のことを知る努力が必要であることを改めて学ぶことが出来ました。

また、この体験で学んだことから、初対面の人も、仲の良い人も、自分から相手に近づこうと努力しなければいけないということが大切だと思いました。自分と相手との間に欠陥があったとしても、すぐに壁を作るのではなく、相手はどういうことを考えているの

か、何を求めているのかを先に考える必要があると感じました。このようなことは、友人関係のみならず、幅広い分野で活用することが出来ると思います。需要者が何を求めているかを優先する供給者のビジネス戦略であったり、争いの中での話し合いであったり、異文化交流などなど。ふれあい交流学習を通して、一歳のまだ生まれたたての子どもから、「人と共存していくためにもっとも重要なことは何なのか」を学び、考えることが出来、よかったです。

泉田真由美

生活科学科

今年で3回目となる、ふれあい交流学習は、総勢24名で、5月28日と6月4日の2日間に分かれ、小野原学園へ行ってきました。今までの1・2回目と比べると、男子の割合も多く、本当に幼い子ども達とコミュニケーションがとれるのか、泣かせはしないか、と実は心配な部分も多少ありました。(幼い乳児の中には、男性が苦手な子もいるので)しかし、実習当日の皆の様子は、保育園の主任の先生から、お褒めの言葉をいただいた内容もあるほど、しっかりしたものでした。特に、男子ならではの身体をフルに使った遊びや、友達との関わり合い方について話して聞かせる様子などは、私の想像をはるかに超えるもの(失礼しました)でした。男子も女子も、実際に保育所を訪問し、一緒に遊ぶなどのふれあいを通して、貴重な体験を積んだようです。

今回の学習を通して、乳幼児のありのままを見つめ、子どもと接し遊んだり、頼りにされたりすることに喜びを感じ、子どもの行動のおもしろさや素晴らしさに気づくことが出来ました。また、改めて言葉本来の意味でのケア(care)する力(単に物理的な世話だけでなく、相手を気遣い心配する気持ち)に気づいた人も多かったようです。

この体験が、皆さんのこれからの人生の中で活かされることを願います。

最後になりましたが、大勢だったにもかかわらず、前回、前々回に引き続き実習を受け入れてくださった小野原学園の皆様、並びに授業等でご迷惑をおかけした先生方、誠にありがとうございました。

<クラブ活動報告>

English Drama Festival

宮地美玲
高等部2年



去る6月22日に、今年で16回目を迎えた English Drama Festival(=EDF)が SIS で開催されました。EDFとは大阪近辺で英語劇に取り組んでいる学校が集まって劇を発表し合う場のことです。以前は順位を決める程多くの学校が参加していました。そのEDFも、ここ数年は2~3校で行う小規模な発表会となっています。今年の参加校は府立長野高校と SIS English Drama Club(=EDC)の2校でした。長野高校は“The Forest Bear”, 私達 EDC は“The Wonderful Wizard of Oz”をそれぞれ発表し、演劇を通して交流の場を持つことができました。長野高校の発表はキャストから小道具、照明まで全てが生徒によって成されていて、学べる点がたくさんありました。

私達が今回選んだ作品は、演劇やミュージカルが好きな人なら誰もが知っている名作「オズの魔法使い」を30分程の劇用に編集した“The Wonderful Wizard of Oz”でした。今まで上演回数の少ない劇を中心に発表していた EDC メンバーにとって、「王道」と言われる作品を如何に「自分達の劇」として演じるかという点は挑戦となりました。しかし、部員一人ひとりが映画を参考に役作りをしてから練習に入ったので練習期間にそれぞれの演技の持ち味と役を上手く合わせる事ができ、結果として魅力的なキャラクターを演じることができました。

また今年も、EDC にとって大きな年となりました。まずは、Education Expo への参加。毎年限られた日数しかシアターを使えなかったため舞台に馴染めていないまま、緊張しながら本番を向かえることが多々ありました。が、今年も Expo のクラブ紹介の一環として発表させて頂くことになり、本番前に大勢の観客の前で劇を上演する機会を得ることができました。本来の予定より発表が一週間早まったので、小道具や衣装の準備が慌しくなりましたが、本番も含めて3回も発表できたことは大きな特権だったと感じています。もう一つの大きな変化、それは部員です。これまで部員のほとんどは高校生で今後の存続が危ぶまれたことも幾度となくありましたが、今年から7年生を中心に9人の仲間が加わり、部員数が一気に2倍になりました。勿論 EDC に欠かせない「笑い」も2倍になり、台詞がなかなか覚えられなくても、演技のタイミングが掴みにくくても、皆の顔には常に笑顔がありました。学年を越えた交流の機会

が増えたことや部活を引っ張っていく上で協力してくれたこと、良い劇が作れたこと、部員の皆には感謝してもきれないぐらいです。本当にありがとう。

これから先、EDC が続いていく中でいろいろな歴史が刻まれると思います。でも、メンバーが変わったとしても EDC の中にある「EDCらしさ」…例えば、常に笑いが(時々爆笑も)あること、皆が演劇の楽しさを心から感じられることは変わらないでいてほしいな、と心から願っています。

最後になりましたが、顧問として見守ってくださった難波先生、Expo で発表する機会を与えてくださった井藤先生、素晴らしい発表をしてくれた長野高校の皆さん、裏方などで協力していただいた方々にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

LOVE IS ALL での3年間

田口佳子
高等部3年

2006年の春、私にとって初めての日本での高校生活がスタートしました。日本に帰って来て、まずはじめに私は、日本で何が出来るのかというのを考えていました。千里国際学園に入学し、田中守先生に出会い、「LOVE IS ALL という部活で、ボランティア活動があるから一度来てみない？」と誘われました。中学生の時から興味があったボランティアという響き。私は早速参加しました。ここで私は、将来これから勉強していると思える様なことを教えてくれた様に思います。

初めて施設に行った時は驚きました。私の想像していた以上に子供達は元気一杯で、おんぶとだっこの連続、落ち着いたと思えば鬼ごっこで走り回り…、帰る頃には腕や腰が痛かったのを覚えています。「聖家族の家」(大阪市東住吉区)という名の児童養護施設の中では、様々な事情を抱えた子供達が何らかの理由で、親から離れて一緒に生活をしています。したがって、一つ一つの言葉に気がつかって、子供達と接していました。しかし私は、何回か通い続ける中で、気付いたことがありました。それは、子供達は私たちに、目で語りかけてきているということ。小さな子供達には、「もっと遊んで」「もう帰るの」「だっこして、おんぶして」の言葉と一緒に目の奥から訴える何かがありました。あれしてあげよう、これしてあげようと、頭で考えて行動したことが、上手くいかなかった理由が分かった気がしました。子供達の目から感じ取れるものを、全てじゃないけど理解して、そして最高の愛情で受け止めてあげることが、子供達と理解し合える事なのだと思います。

私は高1の3月から部長になり、また新たに得たことがあります。それは、部員をまとめる責任感です。部長になったからには、毎回必ず行くと決め、毎回参加する子を募集し、まとめて行きました。ミーティングなどはありませんが、毎回、行っ



聖家族の家

た子には感想を書かせて、みんなの気持ちを考えました。

このボランティア活動で学んだことは、人に何かをしてあげるだけではなく、私自身も心身ともに成長させてもらえるものだったということです。子供達の心の叫びを、もしかもしれないけど自分で感じ取れたということが、私にとって大きな勉強になったと思います。そして、自分を見つめなおす事も出来ました。自分の言葉遣いや態度も、子供達の前に行くと、自然と改まるようになりました。私は、卒業までの間、変わらず毎回行き続けようと思います。その中で、心がけようと思ったことが1つ増えました。それは、自分の力で施設の子供達に笑顔を作ってあげるとのこと。たとえ私と子供達のバックグラウンドが違ったとしても、まるで長い間付き合った友達のように接することで、子供達は心を開いてくれます。まずは自分から笑顔で話しかけること。それがこの部活の中では大切な事だと思っています。ほんの10秒でもいい、たった10秒の関わりでも、子供は何度も笑ってくれます。子供達と遊ぶことだけが関わりではありません。「話をする」「言葉をかける」なども関わりなのです。子供達が、笑顔になる働きかけは、全て立派な関わりなのです。

3年間続けてきて私が感じたことを、この貴重な千里国際学園で過ごす高校生活の中の、LOVE IS ALLという部活を通して知ってもらえたら嬉しいです。少しでも、福祉などに興味があれば、すぐに行ってみたらいいと思います。子供が好きってだけでも全然いいです。そこで何か発見出来ることがあるかもしれません。是非参加してみてください!!

鉄道研究会活動報告

石神宥真
高等部3年

普段なら新幹線を使って2時間半であつというまに行くことのできる東京。この旅行はあえてその新幹線を使わずに東京に行こう、というものでした。夏休み中だから皆時間が取れるだろう、と甘く見ていたものの、意外と(?)部員の多い鉄道研究会、皆のスケジュールがかみ合わないために旅行の日程の決定にさえ大きく時間をとってしまい、またそれにもかかわらず、当日参加できなくなってしまった会員が出てきてしまうなど最初からトラブルばかりの企画となりました。それでもこの企画を実行できたのは、皆の協力態勢のおかげでした。

今回使った切符は普通の切符ではなく「青春18切符」というもので、特急(新幹線含む)・急行以外のJR全線が乗車距離に関わらず一日乗り放題、というものです。面倒なのはそのやりくりで、旅行は3日間であるにも関わらず、5枚セット(¥11500)でしか売っていないために二人で同じセットの「18切符」を使ったり、部員が勝手に自分の「18切符」を持ってきていたり調整は困難を極めました。それでもなんとか必要最小限の金額で「18切符」を利用することができました。

出発は8月28日の朝7時、大阪駅より。JR京都線の新快速に乗り、まずは滋賀県東部の米原駅を目指しました。車内は朝ラッシュの人出と、私達と同じ事を考えていた「18切符」の利用者で混雑しており、なかなか座ることができず、重い

荷物を持ったまま長い間立たされることになりました。終点の米原駅では12両編成の新快速電車から9両編成の岐阜県・大垣行きの電車に乗り換えたため、さらに混雑が激しくなり、周りの長閑な田園風景とは裏腹に車内はまるで大都会さながら。大垣で8両編成の静岡県・浜松行きの電車に乗り換えると、今度は名古屋への通勤ラッシュと重なり、またもや混雑に見舞われることになりました。新幹線なら無停車で通過してしまう静岡県内では、金谷駅で降りて大井川鐵道に譲渡された元・京阪電車を見たり、静岡駅で降りて静岡名産・サクラエビを昼食に食べたりと、新幹線を使わない行き方ならではの楽しみが味わえました。その後、静岡県東端の熱海駅からは2階建てのグリーン車に乗って東京駅に向かいました。途中で熱中症にかかってしまった部員もいましたが、無事に夕方5時過ぎに東京駅に到着。代々木公園の中にあるユースホステルに泊まり、一日を終えました。

次の日は埼玉県にある、話題の「鉄道博物館」へ行きました。夏休み中なので、多くの親子連れなどで混雑していましたが、館内は大変広く作られていて、多少たくさんの方が来たとしてもく問題なさそうでした。この鉄道博物館は入場券がなんとICカードになっていて、ICOCAやPiTaPaのように改札機型の入場ゲートにタッチするだけ



で入場できるという、いかにもな造り。運転シミュレータがあつたり、車両が展示してあつたりと基本的には大阪の交通科学博物館と似たような感じでしたが、館内の移動にミニ電車を使うことができる、食事を取ることでできる場所が2箇所以上あるなど、交通科学博物館と比較してかなり規模が大きくなっているように思われました。テレビ局がタレントとともに取材にきたり、予約制のアトラクションがすぐに満員になったりと、まだまだ注目度は下がりそうにありません。

鉄道博物館で十二分に楽しんだ後、私達は横浜に向かいました。横浜の中華街で飲茶の食べ放題で腹を膨らませた後、東京駅に戻り、夜行電車を待ちつつ、夜を乗り切るための食料などを調達しました。私達が乗ったのは「ムーンライトながら」という東京発大垣行きの夜行快速電車で、「18切符」を使えば片道510円で乗車できるという格安の移動手段でした。とはいっても、この9両編成の電車は終点の大垣に着く前に名古屋で後ろ3両を切り離します——私達が乗ったのは、7両目でした。仕方なく、途中の岡崎駅で乗り換え、別の大垣行き電車に乗ることになりました。再び往路と同様の混雑に巻き込まれつつも、米原では席を確保することに成功し、無事大阪に帰ってくることができました。

トラブルは多少発生したものの、全体としてはこの旅行は成功裏に終えることができました。今回の成功をきっかけに、再びこのような企画が鉄道研究会で実行できることを願います。

夏休みも入賞続出

馬場博史

トライアスロンクラブ顧問、数学科

■ 7/27 (日) いごっそうアクアスロン

高知県幡多郡黒潮町で開催。本学園から26名が参加。炎天下で厳しい暑さの中でのレースでしたが、中学生女子3名男子2名、壮年男子1名が入賞(3位以内)し、他の参加者も全員が完走しました。

＜入賞者＞中学(Swim200m + Run4km) 女子1位藤崎麻理香(SIS7)、2位前田優衣、3位鍋島詩織(以上 SIS8)、男子2位細井陸、3位井山奨(以上 SIS7)、壮年男子(Swim1500m + Run10km) 3位馬場博史(教員)

＜完走者＞中学(Swim200m + Run4km) 浦雄貴、戸松理央、河野遼太郎、三木太志(以上 SIS7)、櫛野弘奈、秋山裕理、萱嶋智、檜木耀、坂下勇仁、藤見洋佑、奥野智紀(以上 SIS8)、山本岳士(SIS9)、一般(Swim1500m + Run10km) 藤井資也(SIS10)、森岡瑛美、阪上夏希、高橋直人、清水稜太(以上 SIS11)、東千歳(教員)、リレー(二人でSwim1500mとRun10km) 吉積悠(SIS10)& 為岡稚子(SIS11)、保健記録牧百合子(教員)

■ 8/10 (日) アクアスロン京都大会

京都市の京都アクアアリーナで開催。本学園から13名が参加。この日も炎天下で厳しい暑さの中でのレースでしたが、中高生が多数入賞(3位以内)し、他の参加者も全員が完走しました。

＜入賞者＞中学(Swim300m+Run2km) 女子8年生1位前田優衣、男子7年生3位細井陸、8年生1位萱嶋智、高校(Swim400m+Run2.9km) 女子10年生2位吉積悠、11年生1位森岡瑛美、男子10年生3位池田憲治、11年生1位清水稜太



吹田市長杯トライアスロン

＜完走者＞中学戸松理央、河野遼太郎、三木太志(以上 SIS7)、高校藤井資也(SIS10)、一般・壮年(Swim1000m+Run6.4km) 宗正久志、馬場博史(教員)

■ 8/24 (日) キッズトライアスロン浜寺公園

堺市浜寺公園で開催。本学園から3名が出場、全員が完走しました。

＜完走者＞中学(Swim300m+Bike9km+Run3km) 女子4位藤崎麻理香(SIS7)、男子5位田和良馬(SIS9)、7位戸松理央(SIS7)
＜ボランティアスタッフ＞ Kento Baba(OIS9)、池田憲治、藤井資也(以上 SIS10)、森岡瑛美、阪上夏希(以上 SIS11)

■ 9/7 (日) 吹田市長杯トライアスロン大会

千里北公園で開催。残暑厳しい中、本学園から30名の生徒・教員が参加し、うち7名が入賞しました。

＜入賞者＞中学(Swim 500m、固定 Bike 10km、Run 2.8km) 男子1位 Kento Baba(OIS10)、2位細井陸(SIS7)、3位脇田優作(SIS8)、女子1位前田優衣(SIS8)、2位 Isabella Freijah(OIS8)、3位藤崎麻理香(SIS7)、高校生以上(Swim 1000m、固定 Bike 20km、Run 5.6km) 壮年(40歳以上) 男子1位馬場博史(教員)

＜完走者＞多数のため省略(上の写真参照)

笑顔で挨拶

長谷川夏子

保健室

今学期から、保健室を担当させていただくことになりました、長谷川夏子です。皆さんよろしくお願ひいたします。

皆さん、挨拶していますか？朝起きた時、誰かに出会った時、ご飯を食べる時、帰る時、誰かに謝りたい時、感謝の気持ちを伝えたい時…いろいろな場面で挨拶をする事は大切です。それは、日本語、英語、その他の言語であっても、挨拶にはたくさんの種類の言葉があります。きっと、大切な言葉だから、たくさんの種類があるのでしょう。

挨拶をされて『嫌な気分』になる人がいるでしょうか？挨拶をお互いに交わすと、とても気持ちいいものです。声に出して「おはよう」「はじめまして」と言えるのが一番いい事かもしれません。でも、いつも声を出せる訳ではありません。そんな時は、目を合わせてニコッと笑顔を見せるだけでも、気持ちがいいものです。

私も今学期からこの学校に来たばかりなので、まだ生徒の皆さんの名前や顔を知らない事が多いです。「お腹が痛いです」とだけ言って保健室にやってくる人が多いです。もちろん、自分の身体の様子を伝えてもらうことは大切です。でもそれだけでは、私は皆さんが「誰なのか、何年生なのか」何も知る事ができません。「おはようございます。何年生の誰それです」と教えてもらえると、私も気持ちよく皆さんと会う事ができます。

挨拶は、気持ちを伝える事と、自分の事を相手に知ってもらうという大切なものです。

まず、朝はじめて会う先生や友達に「おはよう」と笑顔で伝える事をはじめませんか？

高等部生徒会です Student Council '08

今回からインターカルチャーにて報告、お知らせ、ちょっとしたエピソードなどを毎号載せていくことになりました！いつもの生徒会行事等を生徒会からの視線で書いていきます。宜しくお願いします。

☆これまでの行事

・5月24日(土)
例年通り学園祭が催されました。今年のテーマは「ファンタジー」でした。生徒会にとって学園祭というのは旧・新生徒会が合同で仕事



をするという引き継ぎのような行事です。その様子を少し紹介します。毎年オープニングで生徒会メンバーがパフォーマンスをするのをご存じですか？あれはほぼ前日練習のみで必死で覚えます。そして今年は、かつての生徒会メンバー清水航君と松本亮平君からドーナツ&午後の紅茶の差し入れを頂きました。ありがとうございました。

・6月8日(日)千里阪急ホテルにてPROMがありました。(HSの生徒のみ)

毎年催されるPROM。日本ではちょっと聞き慣れない言葉ですよ。あえて訳せば「卒業記念ダンスパーティー」とでも言うのでしょうか。そうです。ダンスパーティーです。参加者はシングル又はカップルチケットを買います。とてもフォーマルなもので、みんなお洒落して参加し会場はとても華やかになります。お互いにドレスや持ち物を見せ合い、褒め合うのもひとつの楽しみですよ。さてさて生徒会はというと、その会場の予約やチケット販売(減価のためのBAKESALEも)や当日の司会・レクリエーションを企画しました。今年は”PROMルーレット”と称してシュークリームを(1つだけカラシ&わさびが注入されているのですが)参加者に食べてもらいました。皆さん素晴らしいリアクションでした^^ちなみに激辛シュークリームは生徒会全員で食しました。中でも毎年やるのはPROM KING&QUEENコンテストのようなものです。当日参加者全員に投票してもらい最もふさわしい男女1人ずつをSIS・OIS

から各一組ずつ選びます。そしてそれぞれに冠やティアラを贈呈するわけなのですが…、男の子の冠がなかなか手に入らず…、結局前日まで見つからず…、本当にぎりぎりのところで東〇ハンズにて手に入れました。さすがに冷や冷やしましたね。中等部のみなさん！高等部に上がったらかんな行事にも参加できます。楽しみにしていて下さいね♪

・6月25日(水)大掃除がありました。全校参加、毎学期末に行われます。みなさん御苦労さまでした。

・9月3日(水)SOIS合同のアゼンブリーがあり、スポーツデーの色決めもそこでした。

☆これからの予定

・10月13日(月)スポーツデー
阪上夏希(SIS11) サマンサ・サイラッド(OIS10)

From this issue onwards, the High School Student Council will have its own section in Interculture, for notices, information regarding upcoming events, and reviews of past events.

PAST EVENTS

The School Festival took place as usual, on the 24th of May (Sat.). This year's theme was "Fantasy". For the Student Council, the School Festival is a significant event, which allows both the old and the new Student Council to work together. It is the precise day of the transition, from the old, to the new Student Council. Here is a brief description of how it went. As many of you know, every year the Student Council performs a dance at the opening of the School Festival. This dance, as is done every year, is practically created and memorized the day before



the festival, but is fit into the Student Council's busy agenda! A brief thank you note to former Student Council members; Shimizu Ko and Matsumoto Ryouhei, for sending us donuts and milk tea. Thank You!*

8th June (Sun). High School Prom at Senri Hankyu Hotel. "Prom" is an unfamiliar event to Japanese people. So for those who are not familiar with it, it is a congratulatory dance party for seniors. Basically, it is a dance party. Participants are able to buy 'single' or 'couple' tickets. It is a very formal event, and the atmosphere in the dance hall is flamboyant and sophisticated. The sight of anxious girls preparing for prom together, and complimenting each other on their dresses, builds up part of the fun and excitement on Prom night. On the other hand, the Student Council is busy planning the date for prom night, booking the dance hall, selling enough tickets, (having bake sales to help reduce the price of tickets) and arranging entertainment plans for the big night. This year, a "Prom Roulette" took place. It was a simple game in which participants would each pick a Profiterole (Shu-Cream) for them to eat. One of the profiteroles was filled with wasabi. Participants were all to act as though they had the spicy profiterole, and the audience had to guess which one of them had really got it. It was a big success! One of the main excitements every year on prom night, is the deciding of the PROM KING&PROM QUEEN (two couples, one from OIS, one from SIS). Everyone in the dance hall places their vote for whom they wish to be king and queen. The winners receive a crown and a tiara. Amongst many annual events, prom is most certainly an event worth looking forward to for middle school students!

25th June (Wed) . Cleaning Day. The whole school participated in the



end-of-term cleaning. Thank you for your hard work!

3rd September (Wed). SOIS had a joint assembly, during which sports day colours were decided.

UPCOMING EVENTS

13th October (Mon). Sports Day!

Samantha Syrad(OIS10) Natsuki Sakagami(SIS11)



ここからは毎号各役職の SOIS 2名が担当します！今回は副会長の松尾都司憲(SIS11)とパク・ハンビン(OIS12)が担当します。

From here, on, members of the Student Council will talk about the Student Council from their point of view for each Interculture. This time's producers are our vice presidents, HanBin Park(OIS12) and Toshinori Matsuo(SIS11).

今回は副会長から見た生徒会メンバー達について紹介します～

では、まず生徒会長について話します！！我が生徒会長は山口留以(SIS11)と北上優太(OIS12)です。留以は、いつも会議中よくかむ会長です。漢字も苦手です。この前なんて飛び箱の漢字を「飛び箱」にしていました。どれだけ飛ぶのでしょうか。でも、みんなのことをすごく思いみんながすごく頼りにできる責任感を持った会長です。優太は、FRIENDLY ジャイアンとよばれています。羞恥心のダンスが得意です。プロムの時なんかは、アフロの格好で踊っていました。優太は、生徒会の雰囲気をもっとよくしてくれる会長です。

次は、書記について話します！！我が生徒会書記は、上原千紗(SIS10)と大田原絵里加(OIS12)です。ちさは、元気で明るいみんなの妹、って感じです。でもちょっと毒舌なところがあります。10年生なのにもしっかりしていて書くミスも無

く、いい書記です。絵里加は、冷静できちんと仕事をしてくれるみんなのお姉ちゃん的存在です。たまに抜けていますが、OIS Senior だけに、核心を突いてくる意見を言ってくれます。でもたまにはマイペースです。

次は、会計について話します！！我が生徒会会計は、阪上夏希(SIS11)です。夏希は、SUMMER TREEとゆうたから呼ばれています。しっかりもので(しかもかなりの)一見おとなしいように見えても実はかなり意見を言います。いつも良いアイデアを言ってくれます。

最後は、通訳について話します！！我が生徒会通訳は、林ちさと(SIS10)とサイラッド・サマンサ(OIS10)です。彼女たちは非常にやんちゃでエンターテイナーと呼んでも過言ではありません。サマンサは、いつも何かを食べてそうなので、食べていないとみんなから何か言われます。そしてツッコミやすいです。ちさとは、早口言葉で意見を言います。ちさとの発想はすごくオリジナリティーがあって、たまに何を言っているのか分かりません。でもいつも爆笑しています。以上、副会長からのメンバー紹介でした。また見てくださいね。By とし(殿)、ハンビン

We will introduce the Student Council members from our point of view～

First, we would like to talk about our presidents!! Our Student Council presidents are Rui Yamaguchi(SIS11) and Yuuta Kitagami(OIS12). Rui frequently twists her tongue during meetings. She is also weak at Kanji. One time, she wrote "flying horse" instead of writing "vaulting horse". I wonder how far the horse can fly. But, she cares about other members, and is a president with great leadership and responsibility. Yuuta is called a "friendly GIAN (character from Doraemon)" He is good at "Syuchisin" dance. During prom, he was dancing with afro hairstyle. Yuuta can change the atmosphere of the Student Council better and warmer.

Next, we would like to talk about our secretaries!! Our Student Council secretaries are Chisa Uehara(SIS10)

and Erica Otawara(OIS12). Chisa is like our cheerful and bright younger sister to us. But she is also pure and gets hurt easily. She is very organized and makes absolutely no mistakes at note taking, despite that fact that she is still in 10th grade. Erica is calm, hard-working, and is like our older sister. Although she's missing a few screws sometimes, she gives opinions that always gets to the point. But sometimes, she does her work in her own way.

Next, we would like to talk about our treasurer!! Our Student Council treasurer is Natsuki Sakagami(SIS11). Natsuki is called as 'summer tree' by Yuuta. She is also very organized, and although she looks quiet at one glance, she actually participates frequently at meetings. She always comes up with good ideas.

Finally, we would like to talk about our translators!! Our Student Council translators are Chisato Hayashi(SIS10) and Samantha Syrad(OIS10). They are such tomboys, and it is no exaggeration to say that they are the entertainers. Samantha looks like as if she eats all the time, but actually she's not. Also, she's really funny to play with. Chisato gives her opinion like a tongue twister (she speaks really fast). Chisato's ideas are rich in originality, and most of the time, her ideas are very good and funny, but sometimes we don't understand what she is talking about. Also, she laughs all the time during meetings.

By Toshinori and Han Bin(SIS and OIS Vice Presidents)



以上、高等部生徒会でした！That's all for HS Student Council!



10年生の清掃ボランティアを企画して

林 真希
高等部1年

6月11日に、学年のクラブで企画して、10年生全員で学校周辺地域の清掃ボランティアを実施しました。

学園祭が刻々と迫っていた時期に、生徒会から私のところへ、学園祭の収益金の使い道についての紙が来た。早速、「クラブって誰やったっけ!？」から始まって、話し合いを実施。そこでは案があんまりでなくて、「例年通り募金にしとく？」となっていました。

しかし、毎年募金で反対意見もあったことや、募金以外に何か使い道はないかなと考えているうちに、実際に私たちがボランティア活動をやってみて、その資金に収益金を使ってみるのもいいんじゃないかという案が出てきて、クラブみんなで話し合っ、一旦みんなに聞いてみることに。そしていざ聞いてみると、反応は・・・微妙。「これはまだ案なので、何か他にいいアイデア思いついたら、明日の放課後までに教えてくださいね!」と言いつつ、その放課後にクラブでまたミーティング。みんなに聞いてみたけれど、他のアイデアは出てなかったの、この使い道でやってみよう!となり、早速取り掛かりました。

まずこの周辺でボランティアを募集している場所や地域を手分けてリサーチ。みんな学園祭が重なって、すごく忙しくて疲れていたのに、ちゃんとやってきてくれました。そこから話し合っって地域を絞っていき、先生にもアドバイスをもらいながら、何回も限られた時間のことを考えながら、最終的に学校から2-3kmくらいのところから学校に向かって清掃しながら帰ってくる、という案に決定!ちょうど中間テストが重なった上、とにかく日数が足りなかったの、猛スピードで準備スタート。市役所に電話して掛け合ったり、スクールバスの運転手さんに話しにいったり、企画書書いてコピーしたり、みんなに説明したり、買出しに行ったり、班分けしたり、地図書いたり・・・。テストやクラブで、きっと他のクラブのみんなも私と一緒に、もしかしたらもっと忙しかったかもしれないのに、頼んだらきちんと仕事してくれて、手伝ってくれ



ました。なにしろ学年全員でボランティア活動をするということが、今まで前例がなくて、不安だらけでどうやって進めていったらいいのかわからなくて、一人かなりテンパってた私を、手伝ってくれたクラブのみんなや、指示したらちゃんと動いてくれた学年のみんな、周りをみてさりげなくフォローしてくれた担任の先生たちに、本当に助けられました。みんな楽しんでやってくれるかな、とか、十分に説明する時間なかったけど大丈夫かな、とか、ボランティアって楽しいって思ってくれるかな、とか、もう頭ゴチャゴチャになるくらい不安だらけでもすごく心配していたし、何よりも自分がちゃんとリーダーの仕事できているかが心配でした。意見ちゃんと聞いているかな、とか、皆を混乱させてしまってるんじゃないかな、とか、これで本当に上手くいくのかな、とかもう色々・・・でもやっぱり最後までやるだけやらないと!と思って、他の人の力たくさん貸してもらって、とうとう本番の水曜日。

正直、大げさやんって思うかもしれないけど、前日の夜、メープルホールから帰ってきた瞬間から清掃活動のことで頭が一杯でした。そしてLHRになって、皆が玄関に集まってくれて、バスに乗ってもらって、何人かは先生の車に乗せてもらって、トンゴと軍手を速攻バスの中で配って、大変な騒ぎになってたけど、何とか出発成功。バス見送った後、思いつきため息が出ました(笑)。

そして皆がぼちぼちゴミを持って帰ってきたところ。「つまんなかった～」とか言われたらどうしようって、内心かなり思っていた私に、みんなが「めっちゃ楽しかったー!!」とか「見てー! すごくないこのゴミの量!!」って笑顔で言ってくれた時は、泣きそうに嬉しかったです。みんなすごい頑張ってくれて、予想していた以上に必死になって拾ってくれて、楽し

んでボランティアをしてきていたのが何よりも嬉しかった。今までのしんどかったことが一気にどこかに飛んでいきました。この仕事やってよかったなあって心底思えました。

クラブ一同みんなものすごく笑顔で終わりました。活動中、小野原の自治会長の笹川さんがお礼を言いに来てくださったり、住民のみなさんに「ありがとう」と言ってもらえた事で、皆も「いい事したんだなあ」って実感が湧いたみたいで、「絶対またしたい!!」とか、「次は一日かけてどっか清掃しに行こうや!」とか、積極的な意見をたくさん帰り際に言ってくれました。みんな本当にお疲れ様、協力してくれてありがとう。

私たちクラブもかなりリーダーとして未熟で、迷惑もたくさんかけたし、混乱させたりしてしまっただけど、自分たちの利益のため以外にもこんなに立派なお金の使い道があること、誰かのために何かするってすごく楽しくて気持ちいいことだっという、私たちが一番わかってほしかった事が、少しでもみんなに伝わって、そこから何か考えられてくれていたらなあと思います。

しんどくて忙しくてかなりキツかったけど、とてもやり甲斐があって、充実していた三週間でした。この期間中何度も授業中寝そうになってごめんなさい。クラブのみんな、本当にお疲れ様でした! ボランティアを一生懸命してくれた10年生みんなも、本当お疲れ様でした! 協力してくれてありがとう。フォローしてくれた先生たちも、無理言っって融通きかせてくれた運転手さんも、ありがとうございます。ViVA 10thGrade, ViVA volunteers?



自治会長の笹川さんと

「留学オリエンテーション」のご案内

栗原真弓

カウンセリングセンター

「留学オリエンテーション」のご案内

色々な理由から SIS 在籍中に海外の学校に留学(最長1年)する生徒が毎年数名います。留学するからには、海外で充実した日々を過ごしてほしいと願っています。そして良い結果をもたらすためには十分な準備期間が必要であることが過去の例でも実証されています。

『生徒と保護者のためのハンドブック』の中の「留学に関して」(P.14)にあるとおり、在籍中の留学については SIS の規定があり、定められた手順に従って準備を進めていくことになります。一方、交換留学生として留学する場合は、選考試験が出発日の1年前から始まります。例えば10年生の夏に出発する場合は、9年生の春から選考試験をする団体もあるので、それ以前に留学窓口であるカウンセリングセンターに相談することが求められます。

カウンセリングセンターでは、5月と10月に「留学オリエンテーション」と称して SIS 在籍中の留学についての説明会を実施しています。「留学オリエンテーション」では、SIS 留学規定や手順について詳しく説明し、交換留学幹団体や試験日程について紹介します。また、留学から戻ってきた SIS 生徒に体験者ならではの助言などを話してもらいます。留学についての情報が欲しい人や計画中的の人は、ぜひ参加してください。保護者の方もどうぞご参加ください。日時・場所は、下記の通りです。

日時：10月23日(木) 放課後 3:45p.m. ~

場所：3階会議室

海外からの留学生のホストファミリー募集

交換留学は、営利を目的としない国際的なボランティア団体により運営され、さまざまな異文化と接する機会を提供することがそ

の目的です。毎年日本の高校生が世界30カ国以上に留学生として派遣されていますが、同時に海外からも多くの留学生が来日しています。しかし、日本では受け入れ先のホストファミリーが少なく、受け入れ先探しに苦慮しているそうです。日本に来る留学生は3月末から約10か月滞在し、日本の家庭に住みながら高校に通いますが、その間専属スタッフのサポートもつきます。

ホストファミリーとして留学生を受け入れた後、自分も留学した日本人高校生が“ホストファミリーの一年間は、自分が留学した一年と同じぐらいの価値があった。それに留学中はホストファミリーの気持ちがよく理解できたので、トラブルが大きくならずにすんだ”と語ることがよくあるそうです。ホストファミリーになることは容易なことではありませんが、海外からの留学生を家族の一員として受け入れることで、日本にいながら密度の濃い異文化体験・異文化理解の機会になります。又、留学予定の人にとっては留学準備の第一歩となるでしょう。興味のある人は、カウンセリングセンターにお問い合わせください。

その他のイベント

・PSATの実施・・・10月18日(土)午前中。

申込締切は10月10日(金)→2200円を持ってカウンセリングセンターへ来て下さい。定員35名に達した時は期日前に締切り場合があります。

アメリカの大学に入学するためにはSATという試験を受ける必要があります。また、海外サマープログラムの高度なアカデミック・コースに申込む際、SATの点数を要求される場合があります。PSATは、SATの模擬試験にあたり、年に1度だけ行われます。必要だと思ふ人は受けてみて下さい。結果は12月頃にきます。

ご質問等はカウンセリングセンター・スタッフの小野寺まで。072-727-5061(直通番号)fonodera@senri.ed.jp

編集後記

私の2008年夏。トライアスロン関係の3つの大会に生徒と参加、この暑かった夏もよく運動しました。シアトルへの旅行ではMLB マリナーズ vs インディアンズ戦を観戦、この日イチローは5打数2安打1本塁打と活躍しました。8月後半はオリンピック三昧、陸上男子5000mでシューズが脱げても最後まで片方裸足で走った松宮選手、女子5000mと10000mを制したエチオピアのディババ選手のラストスパートが印象的でした。スポーツの話ばかりになってしまいましたね。あなたの夏はいかがでしたか。インターカルチャー今号は40ページになりました。ごゆっくりお読みください。(馬場博史)

10月号は夏季休暇中のさまざまな活動報告の記事が多く集まります。私も毎年夏休み中に、何か自分の専門以外の分野に挑戦しようと、学校外でのセミナーに参加しています。今年是小鼓のワークショップに参加しました。能の地謡(バックコーラス)と小鼓の演奏を、浴衣に白足袋そして正座でプロの能楽師の方からほとんどマンツーマンで習いました。最後に1人ずつ舞台へ上がって習った謡と小鼓の成果を発表するという場面では、緊張感は最高潮に。まるで授業でプレゼンテーションを行う生徒のようになってしまいました。(合志智子)

インターカルチャーへの記事・ご感想等は、e-mailでhbaba@senri.ed.jpまでお送り下さい。インターカルチャーはバックナンバーも含めて本学園ホームページwww.senri.ed.jp/intercultureでもご覧いただけます。また広報センター担当の学園ホームページにつきましてのご意見・ご感想などもお待ちしております。

編集：SIS 広報センター 保護者会だより編集：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

当学園にご来園の際は、お車ではなく公共交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

保護者会だより

●「保護者会だより」文責：保護者会 Public Relations Committee
ホームページアドレス <http://www.sispa.jp>

SIS 進路シリーズ ①

……AO入試……

S I S の卒業生の進路は多方面にわたっています。また大学入試制度も私たち保護者が受験したころとはずいぶん変わりました。卒業なんてまだまだ先と思っている方も、すでに大学受験に向けて着々と準備している方も、いろいろな知識や情報を得ることはとても大切なことだと思います。そこで、S I S の進路情報室に取材に行き、新見先生にお話を伺いました。

今回は S I S 進路シリーズ第一弾として、AO入試について取り上げてみたいと思います。

まず大学入試システムについて、大きく分けると下記ようになります。

★一般入試 ★推薦入試 ★AO入試 ★指定校推薦 ★協定校推薦 です。

AO入試 とは、アドミッションズ・オフィス(入学センター)方式のことである。入試の専門官が集まる入学センターが受験生を審査する。アドミッションズ・オフィスは、どんな生徒を入学させたいかをはっきりさせ、応募者は自分がその学生像に当てはまることを様々な方法でアピールする。いわば「マッチング方式」である。各大学が求める「欲しい学生像(アドミッション・ポリシー)」は大学によって違うが、共通して言えるのは、その大学でぜひ学びたいという強い学習意欲を持っていることである。

また書類は細部にわたり、調査・検討するものなので、大学が要求するレベルの資料をそろえたり、課題をこなすことは、一朝一夕ではできない。準備も夏休みから始め、11月前後の出願まで、みっちり時間がかかってしまう。それに、出願をしたとしても、合格の保証もないので、一般入試の準備も並行して行わねばならず、受験生にとっては、かなりの負担になるようである。

次に実際に AO 入試を経験されて、みごと難関大学に合格された保護者の方に書いていただいた原稿を紹介します。

S I S 生が AO 入試を受ける時

親としてできること

7年保護者 深井美貴子

現在次女が7年生、長女は中高の6年間を S I S で過ごし、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の総合政策学部2年生です。今回AO入試受験(アドミッションズ・オフィスによる自由応募入試)について、体験者の親からの視点で書いてみました。

我が家に関して言えば、志望校を決めAO入試にチャレンジすることにしたのは7月末でした。それまでは12年になってから一般入試用の勉強を少し始めていた程度でした。大学によって違いますが慶應のAO入試の提出書類は非常に多く、以前

進路情報の担当をされていた池田先生からは「半端な気持ちで書ける量ではない。絶対にここに行きたいと思っているのでなければ、一般入試の勉強をやりながら書くことなどできない」と厳しく言われていたので、そこまでの強い気持ちがない彼女は特に準備をしていませんでした。主人は自分の母校に娘も行ってくれたら嬉しいとずっと思っていて、私もそうなってくれば一番いいと思っていました。本人は他の大学の学部のほうに興味があるようでした。

それがあることがきっかけで本人と私たち親の気持ちをはっきりと決まり、みんなで協力体制をとることになりました。うちは普段は子どもに任せきりで「勉強しなさい」とも

ほとんど言ったことがなかったのですが、それから応募までの約3週間はとても濃密な親子関係ができた時間となりました。

彼女がまず応募書類に沿って志望動機やこれまでの活動報告やこれからやっていきたいことを書いたのですが、ここで愕然としました。本人自身が自分のやってきたことをよくわかっていなかったのです。うちの子に限らず、S I S ・ O I S の環境で育ってきたお子さんはそれが当たり前になっているので、自分たちが受けてきた教育や能力が他と較べた時に秀でていることを案外わかっていないのです。じゅうぶん他に対してアピールできることがあるにも関わらず、「それがどうしたの?友だち

はみんなそうよ」と思ってしまっているのです。ここで親としては我が子の通ってきた道筋を系統立てて考えること、話し合っただけで子ども自身に納得させることが大事だと思いました。うちの子の場合は小4の時から続けてきたCISV国際子ども村の活動とアメリカ1年留学とドイツ語スピーチコンテストと模擬国連などに参加して得たこととこれからやりたいことを書き出し、なぜその学部でないかとだめなのかを話し合い、何度も書き直すことにより、だんだんと本人自身にも自分の強みと進むべき方向が見えてきました。

また志望校のパンフレットや発行誌を読みこみ、その学校学部が特にAO入試でどのような学生、人材を欲しがっているかを把握するように努めました。ここで親としては客観的な視野も持ちつつ、真剣に具体的に子どものことを考えました。普段からそのようなことを当たり前にしておられるご家庭は別ですが、我が家にとってはこの作業は非常に有意義な時間となりました。

それまでも留学体験記などをインターカルチャにも書いてきていた長女でしたので、文章に関してはある程度は書けるだろうと思っていました。しかし実際書かせてみるとあまりにも人に伝わりにくい文章であることに驚きました。学校の先生方や家庭教師センターの先生はもちろんのこと、主人や私の兄弟姉妹祖母やまわりの友人に頼んで彼女の文章を読んでもらい朱入れをしてもらいました。先生方以外は文章のプロではありませんでしたが、人にわかりやすい文章にする朱入れは誰にでもできます。

自己PRのページは、山のような応募書類に目を通す先生方の身に

なって、「この子に会ってみたい」と思ってもらえる内容にすることに工夫を凝らしました。ビジュアル的に目を引くものにし、客観的な視点を盛りこみました。これはそれぞれのお子さんに合ったことを考えられたらいいと思います。

また私が写真家であることと、主人が多くの就職活動の学生さんを見てきた経験から、書類につける顔写真は大切な第一印象であると考えました。真面目でかたい表情より、この子に会って話をしてみたいと思ってもらえる表情が良いと我が家では考え、私自身が娘の良さを引き出した証明写真を撮影しました。

志望校を決めた時には学校はとくに休みにはいっていましたが、進路情報室の新見先生や担任の山本先生はじめ多くの先生方が、お盆休みのあいだでさえ、必要な書類を手配して下さったり、添削して下さいました。驚くほど親身になってくださいました。

書類による1次試験に合格してから2次の面接試験の間には、お忙しい先生方が時間をつくって面接の練習をして下さいました。おかげで意地悪な質問にも慣れました。3人の面接官を相手に、10分以内のプレゼンテーションを含む30分間の面接本番が終わって本人が最初に発した言葉は「ああ、おもしろかった」でした。少し意地悪な質問にも自分らしく受け答えができ、あっという間の時間に感じられたのも、日頃のS I Sの教育の成果と直前の先生方の暖かい御指導のおかげだと感謝しています。S I Sの先生方はこちらから真剣に熱意を持ってお願いしていけばいくらでも相手をして下さるのは本当です。まずは自分から行動することだと思います。

正直なところ、長女の学力では一般入試で合格することは非常に難しかったと思います。大学側の立場からすると、学力的に優秀な学生は一般入試でいくらでもとれるわけではなぜAO入試を実施しているか。そこをよくみるのが大切だと思います。

S I Sの生徒さんはAO入試に非常に強いと思います。活動が幅広い人が多いし、他校の生徒よりプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力が高いことは事実です。実際別の私立高校に通っている息子が来年は大学受験ですが、姉のようにAO受験するのは学生生活環境が違い、難しいと思っています。

そのほか、親としてやってよかったと思うこと

●AO入試用の書類を書いているあいだ、ぴったり本人に寄り添い、まるで秘書か漫画家のアシスタントのように動いていた。つまり、短期間に膨大な量をきっちり手書きで書かなければならない彼女のために、消しゴムをかけたり、手のマッサージをしたり、コピーをとって来たり、トロフィーなどを写真に撮ったりということをした。これは普段、まったく放任状態だったからこそ親子にとって貴重な楽しい時間となった。

●その期間中自分でも毎日休まず「考現学」という文章を書いて、本人にもメールで送っていた。これは彼女に刺激を与えるためと、ある面では毎日休まず続けることで自分の中の願懸けの意味もあった。

●いろいろな方をお願いして面接官の役をしていただいた。これも面接のプロでなくてよい。

やっておいた方がいいと思うこと

●賞状やトロフィーを保管して取り出せるようにしておく。

●クラブ、サークル、自治会活動、ボランティア、リーダー研修、セミナー参加、イベント参加、地域交流など我が子が何をしたかを把握しておき、どの活動が本人を特徴づけるのによいか理解する。

●本人の短所と思われるところも長所として考えて話し合ってみる。

●時事ニュースを親子ともに見ておく。

→理想としては家族でニュースについて話し合う時間を持つ。

●当たり前のことだが、本人と学校を信頼する。やっておくべきだったと思うこと

●もっと論文コンテストやスピーチコンテスト、数々の賞や検定に応募させておくべきだった。生徒のがんばりや能力が見えやすい賞や資格はやはりあるにこしたことはない。S I Sでも掲示板に多くのインフォメーションが貼っているが、生徒たちは日々忙しいらしく、なかなか応募しない。

その他

●字は真剣に丁寧に書く。この大学この学部にぜひ入りたいのだという気迫は紙面から必ずあらわれる。

●試験官・面接官の気持ちになって考える。

●いくら優秀な生徒さんでも1日や2日では絶対書類は書けない。何度も読み返す時間が必要。

まとめとして。S I Sの生徒がAO入試受験をすると決めた時、親としてできることは、客観的な視野をもちつつも、我が子を信じる一番のよき理解者であり、頼りになる応援団であることではないかと思います。迷った時には「5リスペクト」に戻れば、親子とも不安になりすぎないでしょう。

AO入試は大学側と志望者側のマッチングを創り出すためのお見合いのようなものです。頑張ってもしだめだった場合は、本人がすぐ気持ちを切り替えて一般入試を目指すなり、次の一手を考えられるよう、信じて見守ってやることも大切だと思います。

この一文が自分の希望する道に進もうとしているS I S生と保護者の方の手助けに

なれば嬉しいです。晴れて合格された後には今度は後輩たちに御自分の得たことを伝えていってくださいね。

娘の1年間ドイツ留学を終えて 12年保護者 逢坂 淀美

昨年、留学が決まった電話をYFUから電話をいただいたとき、喜びよりも「本当に行くんだ」と娘を送り出す寂しさに、涙が止まらなかったことを思い出します。

慎重なタイプの長女だったので、一年間の留学を決意したことは大変な自分の可能性への挑戦だったと思います。最初の1ヶ月は、語学研修であつという間にすぎ、いよいよホームステイをしながら、現地校に通う生活がスタートしました。ホームステイを始めるといろいろな問題が出てきて、自らホストチェンジを申し出た時の勇気、NOと言えないあの子がその時あらん限りのドイツ語で、ホストファミリー4人と地区委員を前にして自分の思いを伝えた勇気は、あの子の留学体験記に書いていますが、人生最大の勇気だったと思います。それに伴って転校することになり、また2校目に慣れるまで、ドイツ語で授業を理解できるようになるまでには、さらに半年かかったようで、その間のつらさを支えてくださった2軒目のホストファミリーをはじめとする友人の皆さんには感謝の思いでいっぱいです。日本にいてできることといえば、時折かかってくる電話をすぐにとりたく枕元に子機と携帯電話を置いておくこと、あとは祈ってあげることでした。

半年を過ぎる頃からは、友達もどんどん増え、S I Sで始めたチェロにも助けられ、オーケストラに参加する機会も得て、クリスマスコンサートなどにも参加できてドイツで過ごしたクリスマスは本当によかったと言っていました。帰国前に、先生からメールで留学体験をドイツ語のスピーチコンテストに応募してはどうかと連絡をいただき、応募することになりました。一次試験をパスして、コンテスト本選に出場が決まりました。そして7月7日、日本に無事帰国。帰国後は、ドイツ語の先生に添削指導していただいて、7月26日独協大学で開催のスピーチコンテスト第3部門で2位優秀賞を受賞しました。コンテスト本選を見に行った私は、その姿に本人の努力もさることながら、ドイツでこの子のドイツ語を支え、伸ばして下さった多くの方々、0からスタートした娘のドイツ語を出発前帰国後と支えた下さったS I Sの先生に感謝の思いで一杯になりました。引率いただいた先生は、当日本番まで指導してくださいました。ドイツからの応援のメールや電話に、本当に多くの方々が娘を育ててくださっているのを感じました。本選のスピーチは自分の娘ではないくらい輝いて見えて、人が育つということってこういうことなのかしらと、巣立っていくひな鳥をみつめるような思いでした。帰国して2ヶ月が過ぎました。いよいよ大学受験です。あなたは今度、どこに飛び立っていくのでしょうか？

私たち親は、子どもの成長を祈り、見守り続けるでしょう。

◎特集◎

夏休みの感想

長い夏休みをどのように過ごされましたか？

家族旅行に、海外短期留学にと、それぞれ充実した夏休みを過ごされたことと思います。

今年もどこにも行かず、何もイベントのないまま過ごしてしまったという方も、こんな過ごし方があるのかと来年の参考になるような、保護者の方からの感想を集めました。

ご協力ありがとうございました！

(国内編)

トリアスロンクラブの練習と試合に参加して、充実した夏休みが過ごせました。とくに試合の応援に行くと、SISらしいなぁいつも感動させられます。他のチームよりも断然ノリがいいのと、先生も競技に参加されていて、子どもたちが大声援を送る姿にも感動しました！最後ゴールのテープを切るときラスト30mを応援している全員と一緒に走ります。親子で楽しめたクラブ活動でした。8年生

我が家は3人姉妹。長女と末娘は8歳も歳が離れているせいか、昨年は大学生、中学生、小学生では3人でいてもあまり話が合わないようだった。今年、末娘がSISに入学し、OISの次女とSIS卒業生の長女との共通の話題が増えたことで、3人で学校の話やおしゃべりの話で盛り上がっている光景がしょっちゅう見られた。そして「3人姉妹でよかった～！！旅行に行かなくても、3人で喋ってればすごく楽しい！」という言葉が3人から聞き、どこにも行かない夏休みを少し申し訳なく思っていた私たち親はとても嬉しかった。子どもたちにとっては3人姉妹の絆をはじめと感じた夏休みになったようだ。7年生

学校のサマーキャンプの後、クラブ活動、1週間の帰省後、JFK（ジャスト・フォー・キッズ）のアルバイト、後半クラブ活動と暑い中ががんばっていました。かなり充実していたようです。本人にとってとても良い経験になったようです。10年生

今年はオーストラリアホームステイに7月中行っていたので、それなりに充実した日々をおくっていたようです。親のありがたみが少しでもわかったかと思いきやホームステイ先ではいたれりつくせりで、すっかり馴染んだみたいで、念願だった犬といっしょにも暮らせたしとても楽しかったようです。8月は特になにもなかったんですが、私が仕事に行ってるので、お昼ごはんを自分で作るようになりました。去年は、何か作って置いていったのですが、今年は材料を置いていきました。そうすると最初はインスタントラーメンとかだったのが、目玉焼きを作るようになり、チャーハンを作るようになり少しずつ料理の腕を上げていきました。（味は？？ですが・・・）そうすると、夕食の準備も手伝ってくれてとても助かりましたね。（ちなみに男の子です！！）でもこうして少しずつ自立していくのかなと思うとちょっとさみしいかな？以上が我が家の夏休みでした。それと付けたしですが、夏休みが終わると、お手伝いもなくなりました。息子曰く、夏休みは暇だったから！！ですと・・・。9年生

関西夏休みバスというJRの切符を購入し、JRの旅に出かけました。琵琶湖を一周しようと計画して、朝早く出かけました。京都から湖西線へ、雄琴温泉、坂本を通り、琵琶湖北端の駅塩津から長浜へ、そこで長浜鉄道スクエア、長浜城、歴史博物館、黒壁スクエアなど観光の後、近江牛の昼食。そして八幡山で下車、八幡山ロープウェイに乗り、八幡城跡へ、ここは、秀吉の養子になった秀次が建てた城です。秀次はその後淀君の子（秀頼）が誕生したことにより、後継者を巡り28歳で自害させられたという人物だそうです。なかなか歴史の勉強にもなりました。その後関空快速に乗り夜の関空へ、ほとんど時間もなく帰路へ、終電に間に合い、自宅まで帰りました。時刻表を買い、旅の計画を立てて、観光名所などもいろいろと下調べをしたので、印象に残ったと思います。春休みと来年の夏はぜひ青春18切符で、あちこち旅をしてみたいと思います。8年生

7年の次女はこの夏、熊本阿蘇で行われた小4から25歳対象の4泊5日のCISVサマースクールに参加してきました。日本全国から集まってきた小4-25歳がいろいろなアクティビティをして仲良くなり、信頼を育みます。SIS卒業生で今は関東在住の長女もヘルパーとしてこの合宿に参加しました。一昨年は世界中から集まってきた11歳対象のオーストラリアでの国際キャンプで3週間すごし、昨年は九州でおこなわれたアジア4か国の12、13歳対象のインターナショナル・ユース・ミーティングに8日間参加してきました。来年の夏は同じCISVの海外プログラムに参加させてより多くの世界の友達をつくってきてほしいなと思っています。この夏はそのキャンプ以外はお友だちの家に泊まりに行ったり来たり、プールや地元のお祭りや図書館に行ったりして過ごしていました。あまりにのんびり過ごしている子どもに何か言いたくなるたび、木村先生が夏休み前に「普段忙しい生徒たちですので、夏休みくらいはのんびり過ごさせてやってくださるのもいいですよ」とおっしゃっていたことを思い出しました。cf.(社)CISV日本協会 URL: <http://www.jp.cisv.org/> 7年生

高校生になって初めての夏、なかなかパワフルな忙しい夏を過ごしたようです。まず前半はSISサマースクールの里山家族に参加、ペアレントとしてキャンプの企画等1ヶ月前からほぼ毎日ミーティングを重ね準備、「たいへんだったけど、7年生と一緒に楽しい時間を過ごせた～」という達成感！キャンプからいい笑顔で帰ってきました。7月21日からの4週間はJFKでアルバイト、初日は子どもたちのパワーに圧倒され、この先どうなることか・・・との不安もあっ

たようですが、4月から始めた土曜学校でのアルバイトの経験も生かし、なんとか乗り切れたよう・・・まあ、苦勞あつての充実感。子どもたちと賑やかに過ごせた、あつという間の4週間だったようです。残りは、家族旅行に出かけたり、オリンピックに熱く感動したり、のんびり親子で過ごしていました。今年は特別大きなイベントはなかったものの、親子でゆっくり話す時間も持てたし、個々に充実できた悪くない夏だったかな・・・。10年生

特に遠出をしたわけではありませんが、学校のキャンプ、学校の友だちと東京ディズニーランド、学校のクラブなど学校の友だちと過ごしている時間が多く、それなりに忙しくはしていました。そして、親として一番行ってほしかった大学のオープンキャンパスもいくつか行ってきて、大学の雰囲気というものは感じてきたようです。大学のキャンパスツアーなどで話を聞いて、この学部はちょっと違うかも、とかここはなかなかよかった、とか(何が基準かよくわかりませんが)自分なりに感じた事はあったようです。でも、先生や先輩から「11年生の夏休みは大事に過ごすように」とさんざん言われてきたほどには大事に過ごしたのかどうか・・・親としては心配です。11年生

アンケート形式で感想をいただきました。

①場所 ②期間 ③情報検索 ④感想

①広島県庄原市 ②6日間 ③同じクラスの友だちに誘われて
④日ごろ、自然と触れ合う事も少ない我が子が、早朝から30分マラソンをしたり、自分の洗濯、掃除だけでなく、割り当てられた仕事をしたり、勉強もし、また農作業も手伝ったり…。また、川や山で遊んだり、また自分たちで釣った魚を食べ、そこで取れた野菜を取って料理する。夜は皆で卓球をしたり、ギターを弾いたり…と、本当に盛りだくさんの経験をしたようなので、本当にたくましく感じましたし、このようなところに行かせなければ、体験できない貴重な時間を過ごせたと思えました。少々大げさかもしれませんが、食の大切さや、教育の原点のようなものを親も感じ、勉強になりました。7年生

①三重県 伊勢市②2泊3日③毎夏訪れているので特になし
④行きなれた場所だったのでスケジュール立案は余り困らなかったようです。お財布のひもはかたかったり、ゆるかったり、しかし、旅行にこれだけお金を使っているということがわかってよかったと思います。家族旅行だとやはり、親に頼る部分ができますね。子どもは来年も、同じ場所に行くといっていました。7年生

①広島のフリースクール ②6日間 ③インターネット④本人が帰って来た瞬間からまた行きたいと言っています。自然の中で、自主性を重んじて、子どもたちの育つ力を信じて接して下さる関係者の方の姿勢が、すばらしいと思えました。たまたま、娘が行った時は男の子ばかり15人ということで気後れし、同じクラスのお友だちを誘って行ってきました。2人ともすっかり打ち解けて、働くことの楽しさまで頂いてきてました。また森の中を走ったり、川で泳いだり、野菜の手入れや、出荷のお手伝いをしたりと、とても普段では経験できないことをしてきました。冬は宿舎の目の前でスキーが出来るということで、また行くのを楽しみにしています。7年生

①キャンプ、長期の旅行④普段できない、有意義な夏を過ごしたように思う。学校へ登校しているときと、お休みのON/OFFの切り替えを身につけて、楽しんでた。ハードな60日間へまた



向かおうとする休み最後の日を見るたびにこの学校への魅力を感じます。

8年・11年生

①旅行、野球、テニス、スイミングなど④身の回りの物の整理や準備や計画を前より自主的にするようになった。家族旅行についても自分から提案したり、調べたりするようになり、今までとは違う他の楽しみ方ができた。友だちとの旅行から、帰ってきて爆睡、満足そうだったので、自信がついたのだと思う。日程が変更になったときの判断や連絡方法、またお金の扱い方について心配な点はあります。7月中旬に体調を崩し、食事に気を使った。本人が体力をつけること、健康管理を意識するよう声をかけていたか、親として反省する機会になった。来年への抱負として、何を達成したいか目標意識を持って時間をうまく使えるよう、話し合っていきたい。

※学校への要望として、キャンプはとても充実していてよかった。できれば他にも夏休み中に楽器の練習が友だちとできるような時間とか、先生主体、生徒主体どちらでも、サマープログラムや体育祭に向けての活動など、学校内で何かできるようにしていただくと嬉しいと思います。8年生

①無人島②2泊3日④夜ご飯のための火おこしに2時間もかかったことを楽しそうに話してくれたことが印象的でした。来年も危険のない程度でまたいろいろ体験してほしいと思っています。私は旅行のスケジュールリングが得意ではないのですが、息子は自分で企画して、綿密な計画を立てるのが得意なようです。S I Sでこういう力を鍛えていただいているのだと感謝しております。10年生

①四国④家族で四国の吉野川にて、初めてラフティングを体験！万一ボートから落ちた場合のレクチャーも受けていましたが、落ちることはないと思っていました。しかし、筋書き通りのように急流のときに息子は落ちてしまい、ビックリでしたが、レクチャーどおりの姿勢で浮かんでいたのも、引き上げがスムーズで、無事生還。いやはや自然は、あなどれないと本人も感じたでしょうし、ホッとしたのではないかと(笑)。なかよしの友人が、留学に向けて出発するにあたり、一緒に旅行に行ったりなど、学校で接するのは、また違う時間を過ごせたのでは・・・と思います。その友人だけでなく、留学へ旅立つ同級生との別れに関して(また出会えるとはわかっていても)ちょっぴりですが、少し大人への階段を上がったように感じました。母親から見ている、すごく青春しているなあ～と思えました(笑) そんな高1の夏だったのではないのでしょうか。いや～まったく、これでもかというくらい寝ていたように思いますが、読書をもっともって欲しかったです。アルバイトやらボランティアと

か、お友だちのお母様たちからの声を聞き、自らすすんでこうしたい！というお子さんたちが大きく見えてしかたないですが、本人が動かないのですから、仕方ありません。彼なりの考えもあるでしょうし。来年はそろそろ、自分の進路について自分でしっかり考えてみてほしいです。それが見つかった上で、それに向けての準備をしてほしいですね。がむしゃらに勉強するときが、人生の中であっていいと思うし、それが可能な世代であると思いますので、SISの自由な校風、授業の中で・・・先生方や学校が与えてくださっている環境を勘違いすることなく、貪欲に学習してほしいです。10年生
(海外編)

①ハワイホノルル②20日間③現地の新聞④日本の各地域から、たくさん日本人が来ているので、たくさん友だちができ、毎日がとても楽しい。7年生

①アメリカ②2週間③カウンセリングセンター④オーストラリアのホームステイより寮生活を経験したいということで、シアトルに行かれました。世界各国から来ているのでいろいろな国のお友だちができることと、洗濯や身支度などを自分でしないとイケない状況が魅力です。1単位1時間半の授業を4単位受け、バスで公園やスポーツ施設に出かけて寮に戻るの、消灯間近という毎日だったそうです。日が長く21時を過ぎても昼間のように明るかったそうです。帰る時は、ルームメイトなどの寮で知り合ったお友だちが涙を流して別れを惜しんでくれたそうです。9年生

①ベルギー イギリス②11日間③インターネット④いつも楽しんでくれているはず・・・と思っていますが。7年生

①ニュージーランド②1ヶ月間④本人は、英語の聞き取りがましになったと言っていますが、親にはわかりません。日本人のコーディネーターの方が水疱瘡にかかったとニュージーランドに着くなり聞かされたので、うつらないか心配でした。子どもを短期留学させる時に、親として子どもの予防接種をチェックしておかなければならなかったのに、忙しさにかまけて怠ったことを反省しています。10年生

①フランス②1ヶ月間④帰国後、私の手料理をありがたく食べるようになりました。パリのお友だちの影響を受けたのか、以前より少しオシャレに気をくばるようになっ

たのと、音楽やフランス語の学習意欲がアップしたように思いました。高校生となつての刺激的な夏休み、調子に乗って羽目をはずさないか？と心配もしました。(パリの同年の学生の間ではかなり喫煙や飲酒が多いので)来年もフランスで過ごすことになると思いますが、今年できたお友だちらと元気で劇的な再会ができるといいなと思っています。息子の幼少期には、周りの人に「高校生にもなると口も聞いてくれないわよ！特に男の子はね～」とよく言われ寂しい思いもしました。が、そんなことはございませんでした。オリンピックの応援に一緒に熱くなれてとても思い出深い夏休みでした。来年も何か一緒に熱くなれるものがあればと思っています。10年生

①カナダ(バンクーバー)②1ヶ月③カウンセリングセンター④規則正しく生活でき、勉強はハードでしたが、英語を積極的に使う姿勢が身に付いたと思います。初めての海外で、また1ヶ月も家を離れて心配でしたが、ホームシックになることもなく、またカナダ在住のエージェントが元SIS保護者の方で、サポートがしっかりしていて、安心して託すことができました。良いサマープログラムに巡り合えてよかったですと思います。英語をがんばって伝えようという気持ちが少し意欲的になったかなと感じています。8年生

①ハワイ ②4週間④ハワイで現地の子供たちが行くサマーファン(勉強はなく、毎日バスでいろいろな場所に行つて遊ぶのです)に朝7時から3時まで通いました。旅行中でも計画的に宿題を進めて行ったり、細かい気配りができるようになりました。また昨年と違い、サマーファンやショップなどでも意欲的に会話をするようになりました。今後の予定として春休みにNZにホームステイを計画。また夏休みはハワイでもう少し語学勉強ができるサマースクールを探していく予定です。8年生

①ニューヨークダンス留学②3週間④親の予想以上に本人は楽しんできた。自分の将来などを考え始めた。グループで最年少だった為、生活の細かい部分など心配した。初めての留学で親もいろいろな意味で不安でしたが、行かせてよかったですと思います。ニューヨークでの生活を楽しく話してくれました。今度一緒にニューヨークに行つて案内してくれるそうです。楽しみです。9年生

①アメリカ ②53日間④13年間住ん

でいた場所は彼にとって故郷みたいなもので旧友との交流は欠かせないものです。あちらでの生活は本当にのびのびとしていて彼らしい感じです。水を得た魚的なところがあります。うちの場合は私もついていくし、長男はあちらに住んでいるし、Family Reunion っ感じですね。9年生

<それぞれの夏> 12年生

2年前に卒業した長女に引き続き、次女もいよいよ今年度で卒業です。次女は初めての本格的な受験を経験することとなり、慣れない(!)受験勉強を頑張っております。今まで親の都合であちらこちらに連れまわしてきましたので、新しいところに慣れる柔軟性や異文化経験はそれなりですが、ひと所に腰を据えて目標に向かって突き進む経験は初めてです。自分が何をしたいかを見つけるタイミングも決して早かったわけではなく、親として気を揉んでいなかったと言えば嘘になります。ずっと海外だった夫が帰国し2年間一緒に住んだだけで、再びこの春、単身でカザフスタンに行ってしまったので、受験生の次女と長女を残して、この夏休みに末の息子と現地の様子を見に行つてきました。短い滞在でしたが、しばらく留守をして帰つてくると娘二人の感じがなんとなく違っています。私たちの留守中に、長女は若干希望とは異なるにせよ、自力で就職先を決め、本人の専門を活かせる職場に着くことができていました。それまでトレードマークみたいだったまっ黄っきの頭をダークブラウンに染め直し、きりっとアップにし颯爽とスーツ姿で毎朝出勤しています。なかなか落ち着かない時期が長かったけれど、それも彼女にとっては必要な“溜め”の時間だったのでしょう。おしゃべりな長女と異なり、大人しい次女が久しぶりに自分から将来についての話をしてくれました。彼女もまた私達の留守中に色いろと考えたようでした。間に合うかどうかかわからないけれど、この道で頑張ってみると言った彼女の顔は真剣で清々しく、ああ成長したなと感じました。ゆっくりでいい、彼女らしく、しっかりとした足取りで歩いて行けばいい。久しぶりにパパに会えた末っ子も、また4ヶ月後に会えるまで、パパとの約束を守ってボクも頑張るよと元気に登校しています。

夏は子どもを成長させます。まだまだ大変なことがあるだろうけれど、親は少し距離を置いた場所で後ろから子どもたちを見守るにこしたことはない。そう改めて感じた夏でした。

ちょっといい話

PR委員は見ていた！（6月12日のメールより）

A：昨日帰るとき、生徒たちと先生がゴミ袋をもって掃除していました。学校周辺ならわかるんですが、関寿庵（循環器に抜ける道）前の道までしていました。あれはなんだったんだろう？

B：あっ！！私も見ました！

歩いて帰る道で、三井ホームの分譲地の前で5人くらい、ゴミ袋一袋いっぱい拾っていました。やっぱりあれはうちの学校の生徒たちですね。

C：私も見た！うちの子どもに聞いたら、10年生がロングホームルームの時間にやっていたようです。カルフルの方まで行っていたらしいって。

D：学校の駐車場に先生方もいたよだけど・・・。

という話の真相は・・・生徒会から学園祭の利益はみんなのために使うようにとの指示があり、10年のクラレブの話し合いで「ゴミ拾い」に使おうということになったそうです。お金の一部を使って、バスを借りてゴミ袋、軍手、トンガなどを購入し、ロングホームルームの時間に実行したということです。5～6人のグループに別れ、それぞれの場所にチャーターしたバスで行ってゴミを拾いながら歩いて学校に戻ってきたということでした。かなりのゴミを拾ったようです。なんともいい話ですね。

11月15日（土）インターナショナルフェア開催！

今年もOIS・SIS両校の親睦を目的に保護者主催のお祭”インターナショナルフェア”が開催されます。

★世界各国のフード&グッズ、さまざまなエンターテイメント！

★今年もごみの減量化、マイ箸&マイスプーン持参運動を推進します。（学校ロゴ入り携帯箸も限定販売）

★出店、出演、ボランティア、そしてエコへのご協力をお願い申し上げます。※当日はお車でのご来場はご遠慮ください。

変わりゆく学校周辺



小野原東（関西スーパー）に抜ける道
＜中庭の花壇＞

前号で紹介しました中庭の花壇・・・

実は12年生のボランティアの方々の活動でした。静かなボランティアとして季節毎に素敵な花壇を作って下さっています。既に11年生の方とも引き継ぎが行われ、これからも季節を感じる演出で花壇を飾ってくださることでしょう。

＜報告＞

9月13日（土）3時から5時半 シアターにて
学校法人関西学院 阪倉常務理事と保護者との懇談会が開催されました。出席69名

連休中であつたにもかかわらず、私的な立場でお越し下さり関学について、また合併に関する内容を説明していただきました。その後たくさんの保護者との質疑応答の時間を持つことができました。

とても意義深い懇談会で、また機会があればこのような場を設けてくださるとのことです。



第2回 お料理教室開催（Board 主催）

9月24日&30日

講師は9年12年の保護者でフランス人のアニエスさんでした。

メニュー Pommes de terre aux lardons

じゃがいもとベーコン煮込み、サラダ、パン、アップルパイ
★日本人はフランス料理というと、高カロリーで重たいイメージをもっていますが、フランスの家庭料理は低カロリーでとてもヘルシーなんです。（講師より）

● 参加者の感想 ●

- 簡単にできておいしくて、子どもにも食べさせたい。
- フランスでは、サラダを最後に食べるとか、じゃがいもをお水ではなくお湯にさらすとか聞いて、日本とフランスの食文化の違いを感じました。
- おいしかったし、身近な材料でできたし、ほんとうにプロバンスの香りがした。
- 違う野菜でもできそうだったし家でもぜひしようと思った。
- ただ料理を習うだけじゃなくて仲良くなりたり世界の料理にふれることができるのも、SISならではのと思った。
- おいしい料理をいただいて優雅な週末の時間を感じ 手際よく料理のポイントを教えていただくられた。



○次回は、イタリア料理、メキシコ料理など期待します。

○終始和気あいあいとした雰囲気の中で楽しく過ごせた。



9月24日参加者 集合